東京帝國大學圖書之印

發刊の因由

人と地上に生滅し、地上に始終す、地と人とは造次顛沛だに別かるべからざるもの。上下五千載、水陸三千四百五十萬方里、人文の消長、王覇の興廢、偏へに太塊の上に活動すとせば、「地と人との交渉」を考究するは、予輩人類たる者の特に力むべき所。唯だ歐米の地理學家と號ふ者、其見大抵は此所に出でず、單に地を地として考究するのみ、地と人との干預を極論する者殊に少なきを憾となす。茲に自から力を惴らざるも、『山水叢書』なるものを發刊し、取次に「地と人との交渉」を考究せんとす、而かも事未だ桑創に屬し、予輩が立言の足らざる所正に多きを知る、乃ち世上博雅の君子が叱正を切に待つ。

明治二十九年十二月三十一日　著者識

河及湖澤目次

緒言……一丁
(一)河流の大勢……五丁
(一)河源……五丁
(一)河源としての雨水……六丁
(二)河源としての雪水及び氷河……六丁
(三)河源としての湧泉……七丁
(四)河源としての湖……八丁
(二)上流……十丁
(三)中流……十一丁
(四)下流……十二丁
(五)河口……十三丁
(三)河の方向……十七丁
(四)河の長短、大小……十九丁
(一)河の長短……十九丁
(二)河の大小……十九丁
(五)河と人生……二十四丁
(一)河の所在は坦平なり……二十五丁
(二)河の所在は風沃なり……二十八丁
(三)河の所在は交通に便なり……三十五丁
(四)河は航運に利す……三十八丁
運河……四十一丁
(五)河は灌漑に資す……四十五丁
(六)河は水力利用に供す……四十九丁
(七)河は諸穀の生業と授く……五十二丁
(八)河は雜多の便宜あり……五十三丁
(六)日本史……五十四丁
(七)朝鮮史……五十八丁
(八)支那史……六十三丁
(九)支那の三大河の文事……七十五丁
(一)黄河……七十五丁
(二)楊子江……七十七丁
(三)峨江……八十四丁
(十)西洋史……八十七丁
(十一)河湖地名考……九十三丁
(十二)米國史……百〇一丁
(十三)湖及澤……百〇五丁
風景……百〇九丁
日本の地質と衆議院議員撰擧區……百十三丁
終……百十四丁

山水叢書

河及湖澤

志賀重昂著

(一) 緒言

若し夫れ夕陽淡路島の一角に殘りて、東の方生駒の山色次第に紫ならんとし、身は一幅應舉の畫中に在る處俯して淀の江面を臨めば、汪々として巨津を作り、商舶賈船水を爭ひて錨を下し、十萬の人家兩岸を擁して立ち、大坂の市、百貨を呑吐し、億萬金を開闔し實に日本國商業の中心と稱へらるるかも一の淀川にして在るなけんか、其の形勝たる縱令南日本の關門と號ふるも、如何ぞ商舶賈船の爭ひ來る此の如きあらんや、如何ぞ百貨の呑吐、億萬金の開闔此の如きあらんや、徒らに蘆荻千年、よしもあしも狼藉として、漁莊蟹舍の其間に參差するに過ぎざらん、唯だ一の淀川あり、是を以て巨津を作り商舶賈船の出入に供へ、是を以て道頓堀、長堀、東横堀、西横

緒言 淀川 大坂市 大坂の生命と淀川

北上川の小牛田陸前の小牛田停車場より陸中の沼宮内停車場に到る間

東北日本東半に於る物産の天然的出口

堀等の運河を繫ち漕舟の用に利し、是を以て攝津の東南部十餘方里の沖積平原を構造し、十萬家の市街を其上に立基せしめ、沖積平原は曳きて東西に延緣し、攝津、河內、山城の三州九十七萬(大坂市四十九萬人、攝津三十一萬人、河內十萬人、山城七萬人)の生靈を其上に衣食せしめ、是を以て無慮十五萬町歩なる田畝の灌漑に資せしむ、仁德天皇の難波に大宮居を定めさせ民の竈の賑はひつるを見そなはし玉ひけるも此川あるが爲めのみ、西行法師が身を雲水に托し、頃、江口の邊に官道のありたるも此川あるが爲めのみ、豐太閤の群雄を驅使して大城を築きたるも此川あるが爲めのみ、大坂の生命は正しく淀の一水に歸す、觀じ來れば淀川の功德や千萬無量、若し夫れ滝車仙臺市を去りて北に入らんか、陸前の中部より陸中、陸奥の境界に到る一百十哩の間、髮の如き鐵道幹線を敷き得たるは實に北上川あるが爲めのみ、獨り東北鐵道線を敷き得たるのみならんや、此川や能く十八萬町歩の沃地を沖積し、以て莫大の穀類(米、麥、豆、麻、綿、材木、桐下駄臺を產出せしむるのみならず、亦た東北日本の東半なる物產の天然的出口となり、兼ねて東京地方より木綿、古着、舶來和製小間物、砂糖、藥品、石油、甘藷、蜜柑の類歲々三千五百駄を運入する溝渠となる、豈に這般の有形的功德に止まらんや、川は古來關西、江戸の文化が東北日本に入るの大衢路なりき、北上川の有形上に無形上に東北日本を利濟せしもの尠少なりとせんや、若し夫れ石狩川に至りては、蝦夷の榛莽の啓かれたるも此川あるが爲めのみ、札幌の開府も此川あるが爲めのみ、內陸の中心たる上川に離宮地を相せられたるも此川あるが爲めのみ、百三十哩の鐵道線を敷き得たるも此川あるが爲めのみ、東西六十里田畸墟落秋々として畫くが如く新開地の活氣鬱勃たるものあるも此川あるが爲めのみ、鮭、鱒の潑剌として網に入り巨萬金の利潤を漁民に附與するも此川あるが爲めのみ、所謂北海道拓殖の門戸は畢竟石狩川の爲めに開かれたるもの、淀川や、北上川や、石狩川や、日本國の人文、經濟に干預する此の如く大且つ深し、日本に於ける王覇の興亡、世運の推移、齊しく河畔に決斷すとせば、彼の黃河及び楊子江畔に「堯舜且文武末葉操丑淨、古今來許多脚色」の演出されたるも、埃及はナ

陸西江戸の文化東北日本に入るの大衢路

石狩川

石狩川と北海道の拓殖

炭礦鐵道二百五哩の內

黃河　楊子江

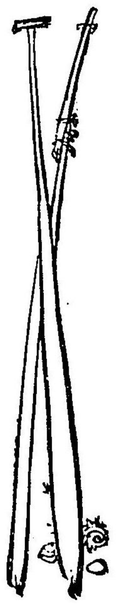
ナイル河

ライン河

ミシッピー河

緒言

イル河の恩賚なり」と喚ばれたるも、「ライン河の歴史は西部歐羅巴全躰の歴史なり」と稱へられたるも、「ミシッピー河は米國致富の大原素なり」と呼號されたるも、眞に然りと謂ふべし。深い哉川の功や、大なる哉河の德や、曰く「土地を滋潤し、魚鰕を生育し、舟楫を通利し、人民を補益す」(赤松宗旦)と、曰く「五行始焉、萬物之所由生、元氣之腋液也」(范)と、曰く「大河は猶ほ上帝の無量壽の如くに動くなり」(西言)と、宜べなり言、我れ請ふ今より君と共に輕舟に楫し、煙簑雨笠、河を上下して之れを探討せんか。



豐王一劍定中州、大阪名城控上游。久使益揚稱沃土、頻聞河渭轉漕舟。歌聲春合煙花市、客夢風寒蘆荻洲。自是千年藏羽氣、龍盤虎踞亦金甌、大阪。

古賀穀堂

河流の大勢

河源

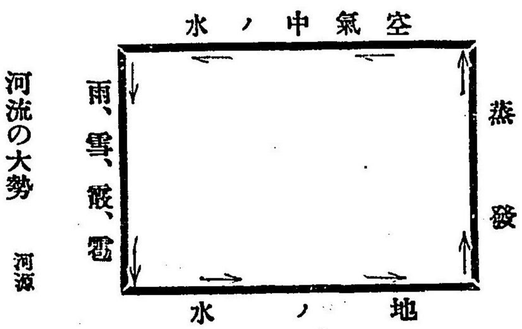
水の循環

河流の泉源

(二) 河流の大勢

河流の大勢を探討せんか、(一)河源、(二)上流、(三)中流、(四)下流、(五)河口。

(一) 河源



河流の大勢　河源

大は太瀛の水より、小は硯池滴々の墨汁に至るまで、凡そ渾圓球上に在る水分とては、綿々として始終蒸發せざるはなく、斯くて此の空中に英英浮游せる水蒸氣は、一たび溫度を失ふや、忽ち凝縮し、雨となり、雪となり、霰となり、雹となりて地に下り來り、遂に河流の泉源となる。是に於てか知る、地の水は一たび天上の水となり、天上の水は、復た地の水となり、地の水は復た天上の水となり、此の如く永劫萬代の間循環又た循環し、以て太地の經濟を整齊することを。

河源として雨水
湊川
ラデヰー
河源としての雪水及び氷河
雪水

河源を大別して四となす、(一)雨水、(二)雪水及び氷河、(三)湧泉、(四)湖。

(一)　河源としての雨水

雨水の直ちに河源をなすものあり、平時に當りては、河身盡く露はれ、白沙燦々の間、鏡の如き水溜りの點々するのみ、而かも一たび雨に會ふや、流水奔然として下り、雷轟虎鬪、一時の壯觀を盡すもの即ち是れ。攝津の湊川は此の好模本にして、人をして坐ろに楠公が平時は鈐韜に潛思嘿修するも、一たび風雲起り旗鼓動くや、輙ち暗啞叱咤一以て百に當るの健戰を轉想せしむるものなきにあらず。亞拉比亞の所謂「ラデヰー」亦た是れにして、知名なるシルハンダワッシル、アフクンルムマの諸河は皆此種に屬し、特にルムマの如き蜿蜒三百二十里、平時は一帶の乾沙に過ぎず、其他亞細亞の內陸、濠太利の內陸(此種の湖もあり)に至りては、此種の河殊に少しとせず。

(二)　河源としての雪水及び氷河

春風忽ち度りて魚氷に上り、四山の累雪一時に融くるや、雪水は幾條の銀

越中立山以北の小川流
楊子江
氷河の融解
恒河
シル・ダリヤ
ライン河
ローン河
河源としての湧泉
伏流
利根川
筑後川
吉野川
北上川
信濃川

絲となりて山側に沿ひ、頻りに平地に下り去り、地の低所凹所を捜めて遂に河流と化成し來る。越中立山以北に此種の小川流間、發見せらる。若し夫れ外國に至りては此種の河流最も多々、彼の唐人の岷山に發すと記載せる楊子江の如き、近く岷山に發せずして、實は遠く崑崙南側の雪汁より由來するもの。其の氷河の融解より由來するもの、如きは、彼の天竺人の神視せる恒河は大雪山中より、北史の「藥殺」と稱ふる中央亞細亞のシル・ダリヤは天山山中より、歐羅巴中原の二巨水ライン、ローンはアルプス山中よりし、悉く口數へて指屈するに暇あらず。

(三)　河源としての湧泉

雨水、雪水の地中に浸入するや、岩石の罅隙に潛伏し、集合して流動し、所謂「伏流」を作り、漸く滙溜して再び地表に湧出し、遂に河源を化成するもの往往然り。坂東太郎の利根川、筑紫次郎の筑後川、四國三郎の吉野川の如き皆此種に屬し、其他北上川に、信濃川に、日本の大川と稱ふるもの大概は是れならざるなけんとす。支那に在りては元の都實が自から探檢して「有泉百

黄河

ダニューブ河

餘泓、沮洳散渙、弗可遏、視方可七八十里、履高山下瞰、燦若列星、名火敦腦兒、火敦譯言星宿也」と記載し西洋の地理家亦た此事を信認せる黄河の如き、歐羅巴洲にては、獨逸バーデン山中の三湧泉より發源せるドノー河（所謂多瑙河）の如き亦た是れ、想へば此の東に在る百泓の泉、西に在る三個の湧泉、一は三皇五帝より周、秦、漢、隋、唐、五代、宋に至るまで四千年間の治亂成敗を噴き出し、一はケルト民族、チュトニック民族、スラヴォニック民族、蒙古人種の大遷徙より剥下バルカン半島の東方問題に至るまで四十三世紀間の隆替消長を噴き出したる源水ならんとは、如何に天馬空に行くの想像力を逞ふするも、猶ほ且つ描く能はざる所ならんか、木の下の影、幾掬の石清水、實は古今を包括し群豪を擒縱するの大活素、

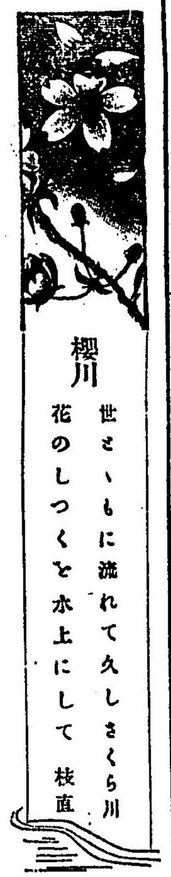
（四）河源と～ての湖

河源としての湖

淀川
天龍川
阿賀川
釧路川
阿寒川

湖の河源となるもの、淀川の琵琶湖を發きて來り、天龍川の諏訪湖を絞りて出で、阿賀川（岩代越後）の猪苗代湖より、釧路川（北海道）の釧路湖より、其の支流阿寒川の阿寒湖より排去さるゝが如き即ち是れ、獨り日本に止らんや、寰宇の蒼々莽々たる大川長江も、遠く其の本源に溯れば、大概は湖に發するもの、試みに指點せんか、

河	所在	發源の湖	湖の所在
アンガラ（エニサイ河系の主流）	西比利亞	バイカル	西比利亞の南部
イルテッシュ（オブ河系の主流）	西比利亞	アルタイ山中の一湖	アルタイ山中コブド高原の西南側
インデュス	印度	カングリ山中の一湖	西藏高原の西南側
アムダリヤ（パンジャ、アクス）	中央亞細亞	ヴォクトリヤ、バルカル、ヤシン	大パミルの山中、小パミルの山中
ボト	伊太利	アルプス山中の二小湖	ヴォソ山の北側
ナイル（白ナイル、ヴォクトリヤ、ナイル）	亞弗利加	アルバート、ニアッサ、ヴォクトリヤ、ニアッサ	赤道線の少北
ミシッピー	北米合衆國	イタスカ	合衆國の北部ミネソタ州
アマゾン	南亞米利加	ラウリコチャ	秘魯國内アンデス山の西側



櫻川　世とゝもに流れて久しさくら川
花のしつくと水上にして　枝直

(二)　上流

河水源を出づ、其の初めは晶明清洌、幽々として荆棘雜草の擁蔽せる間を潛り、正に是れ

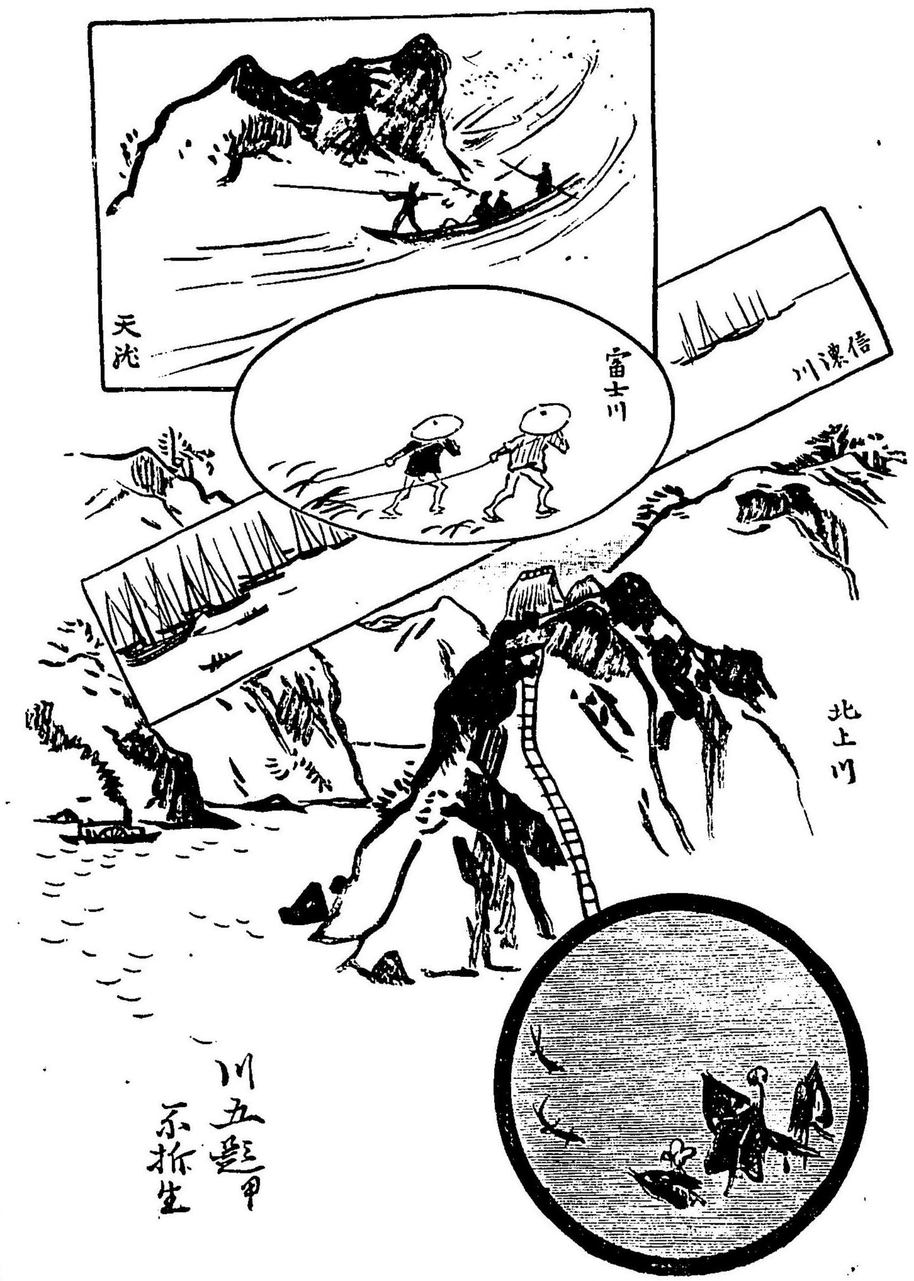
ひゝきくる松のあらしに埋もれて　　蘆庵
たえまかちなるたゐの水茂せ

の景致あり、既にして沙動き礫鳴り、潺潺として自然の琴を彈じ、巖石に隨ひて屈折する際、這般の小流は左よりも到り右よりも來り、十澗百溪湊注して水漸く嵩り、且つや上流地方は水蒸氣凝縮し、降雨も亦た頻々なるを以て、水愈〻多く勢益〻猛く、地面の傾斜急劇なると共に、湍々を飛びて下り、大巖を挑み、礫ち、亂石と衝りて馳逐し、却て沙を率ひ礫を驅り巖石を提げて武器となし、恣に所在の土壤を浸蝕して自己の所領を大に擴げ且つ深く鑿ち、兼ねて兩岸巖石の罅隙に滲入し、更に內部より攻擊して、遂に河道を作る、是れを上流の大勢となす、岩に堅緻なるあり、脆軟なるあり、脆軟なるものは流水の之れを浸蝕すること容易に隨て河道廣大なるも、堅緻なる

上流　五

武藏國多摩川の上流

蕗橋　丹波山村　氷川村　鴨澤村　吉野谷



河の流域

信濃川口　田野間の細流　富士川を浙る處　天龍川上流　北上川中流

上流の水は巨鮮

上流の職責

破壞的

上流の愛すべき所

中流

中流の特色

段丘

ものに會へば自から狹窄なり、而かも上流の水は、畢竟巨大なる鋸の用を、なし、其の職責は、河道を、鑿ち、且つ、擴ぐるに、在るもの、唯だ勢力迅速なるを以て、沙泥を沈澱堆積するが如きは、些も顧る所にあらず、此は是れ分別盛りなる中流、老成なる下流の爲す所に任す、上流や宛も快活の年少子、謂ふ勿れ、上流の能事は破壞のみと、克く破壞の行業を成就せずんば、如何ぞ中流、下流に建設の行あらんや、況んや此所に飛瀑あり、急瀨あり、盤湍ありて、水の氣韻眞個に生動するものあるかや、水の皓愛すべきは、上流に在り。

(三) 中流

河、方さに亂峯の間を去り、會、丘陵地に出づるや、所在の傾斜漸く緩漫となり、幅も亦た太まるを以て、流勢自から緩漫となり、浸蝕も殊に猛烈ならず、谿開けて炊煙間〻起り、時に鷄犬の聲を聞き、輕舟上下して、次第に人間に近くを知る、古人「山舒、水緩、有土田」の句あり、是れ中流所在を描く好個の措辭、蓋し中流の特色は、汎濫毎に沙泥を兩岸に沈澱堆積し、層々階段の如きものを疊み、所謂「段丘」を構成するに在り、段丘は本州の河流に之れを見る

中流の職責破壊的又建設的

高地と低地との中庸物

少きも、北海道の大川には多く之れあるを認む。要するに中流の職責は、河道を擴ぐると同時に、土壤を浸蝕し、且つ堆積し、破壞と建設と兩々相衡平するに在るもの、而して段丘地は實に高地と低地との中庸物。

(四) 下流

下流の職責建設的

河、既に丘陵地を去るや、土地の傾斜愈〻緩漫となり、幅益〻太まり、流勢も亦た自から緩漫を極め、遂に土壤を浸蝕せず、唯だ上流、中流より傳送せる沙泥を沈澱堆積するに過ぎず。既に然り、下流の職責は專ら土壤を沈澱堆積し以て新陸地を經營するに在り、要は全然建設的なるもの。是を以てか自然の景象も亦た悠々に、江面渺彌、煙波掩映し、岸遠く山更に遠く、所在は田畝頻りに開け、且つ河道は下流に趨くに隨ひ常に大なる弧を畫きて曲折すれば、若し夫れ春色蕩胎の候に到れば、麥苗菜花の間に風帆を認め、翠色、黃色、白色の錯綜するを見、更に沈澱堆積の結果として沙洲、渚汀隨所に現はれ、若し夫れ霜氣秋に横はるの節來れば、白蘋紅蓼轉た人に可に、鮭魚潑剌として網に上り、荻花雪の如きの邊時に鴻雁の下るを看る。下流の酷愛

下流の酷愛すべき所

沙洲　渚汀

下流に於ける自然の景象

すべきは、平和の所に在り、優長の所に在り、繾綣として畫の如き所に在り。

(五) 河口

河口

河水滾々として身キに就き、遂に流れ了るや、(一)洋海、(二)湖澤、(三)他の川河に注ぎ入るを例とす(沙中に注ぎ入りて消失するものも時にあれど)。其の注ぎ入る所を「河口」と稱ふ。河水の此所に到るや、流勢は頓に減殺するを以て、上流、中流、下流より傳送し來れる沙泥を頻りに沈澱堆積し、漸く渚洲を構成し、汎濫毎に益〻沈澱堆積して益〻擴大するや、河水は爲めに這般の渚洲を裂き破り、幾多の岐流を作りて洋海若くは湖澤に朝宗す、故に渚洲の形は宛として白扇を開きたるが如くマを現はす、是れ所謂「三角洲」の起生する所因然れども注口(洋、海に注ぐものゝ)に於ける海潮の干滿劇甚に、河水にして之れを抵排する丈ケの勢力なけんか、海潮と海浪とは河水の傳送し來れる沙泥を浚へ去り、注口の土壤を削り取り、河底を深くし、些も三角洲を造らず、却て幅廣く底深き「江港」を鑿ち來る。知り得たり、河口は自動的に、は三角洲を造くり、他動的には江港を鑿つことを。

三角洲

江港

河の自動的及び他動的作用

日本の川河たる上流下流ありて中流なく將た上流のみにして中流下流なきもの少しとせず是れ地幅狹窄にして巍峩たる山系は國の中央に連亘し河底の傾斜特に急劇なるに因るもの飛騨の益田川初出水無嶺下便分爲兩派至此(船戸)再相會非復向者涓流自恃其勢力互不相下奮躍百闘乃合擁沙走石聲聞數里飛騨美濃以此爲界對岸美濃金山亦村市閑然二川既合同爲飛騨川入美濃之域由井尻過柿野皆武儀山中也百泉亂注水勢逾壯然岸石對峙束之兩岸之間稍狹細語相聞水高數丈溪旁人家仰聽水聲而往往又大石側出每阨其流水更躍丈餘倒射石角零珠碎玉的礫灑空宛如飛瀑終日不止未幾亂石如林盤錯水中巨流爲之如滅如沒但見其噴雪濺珠沸騰乎石縫中耳已而崖谷忽開汪洋無際魚鳥相忘乎其中平波散漫而逝是日使擔斗酒而隨焉行採菰蓴聚松柴以爨火濕紙包煨味極芳烈又水產溪鰡土人設竹簰以捕之就買數枚其大尺餘山水奇絶既不可狀谿路如綫逐流而轉每路

中流なきもの

上流と寫す一往驟と句爽氣と句飛駕し越し來と句下流に至り風と句描く筆意轉て空に領し磐人の如き十里胸に谿字らしむ個に神來の眞文而軒豁文と能く詩と能く數然智數に而拔出す當時に容れらるるも空しく酒に隱れて死す此文やすし千古死せず

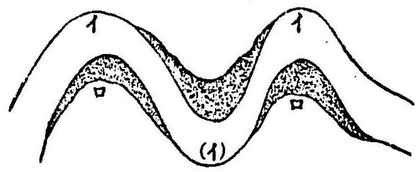
欠

MISSING

河の方向を定決する太要

(三) 河の方向

河源を出づるや、即ち卑キに就き、地皮の破綻割裂せる部分に入り、障碍物に會へば避け去り、先づ岩の軟弱なるものゝみを目懸けて浸蝕す。是を以て河道自から曲折するや、水は弧の凹所イ(イ)イに沿ひて專ら駛走し、凸所ロロは流勢爲めに定靜となり、遂に沙泥を此所に沈澱堆積す。愈〻沈澱堆積するや、凸所は益〻凸となるを以て、凹は愈〻深入して益〻凹となり去る。故に兩對の凹所時に連絡して新に直路を造くることなきにあらず、此の如くなれば、舊河道は或は湖澤となり、或は乾涸するに至るを常とす。獨り軟弱なる岩のみならず、水分多量にして河底の傾斜急激なりせば、輙ち堅緻なる岩をも浸蝕す。



と雖も、要するに地勢の卑キに就くと、岩層の走向に隨ふと、軟弱なる岩を搜めて浸蝕すと、此の三の者、實に河の方向を定決する太要となす。阿武隈

河の方向

阿武隈川と北上川

川と北上川とは一は南よりして北駛し、一は北よりして南走し、兩々の注口相背對して同一の仙臺灣に朝宗す、是れ本州中央の分水大山系と太平洋岸の山系阿武隈山系及び北上山系との間に南北に駛走せる溪谷(所謂[横谷])あり、南に在るもの即ち阿武隈山系に沿ふものは北に向ひて低下し、遂に太平洋岸山系の割斷せる仙臺灣に到りて盡き、北に在るもの即ち北上山系に沿ふものは南に向ひて低下し、是れ亦た仙臺灣に盡く、而して阿武隈川は南の溪谷を駛走し、北上川は北の溪谷を流下するを以てのみ、河の方向豈に偶爾にして然らんや。

四首、自から北方家健の氣象あり

夕立の阿武隈川と押し出しぬ　阿武隈川　寶馬
稻妻の紅粉なかしけり　最上川　柳居
白雨や雲はころひてころも川　衣川　津富
一川刀勝水逶迤、繞岸垂楊十萬枝、誰識氷溟接
疆域、春風吹度北蝦夷　十勝川　佐藤牧山

河の長短大小

河の長短

長河

短川

日本に長川河なき理由

河の大小

河の大小の準據如何

(四) 河の長短、大小

(一) 河の長短

山影遙かにして、四望浩々に、地勢廣寞にして坦平なり、此間に在る河や長くして、蜿蜒千百里、眞個に白雲の中より來るの概あり、所謂[長河]、[長川]、[長江]是れ、山近くして、所在は起伏し、地勢も亦た狹窄なるや、此際に駛走する河たる、短くして、流勢激越雄快、所謂[短川]是れ、特に日本の如きは、幅狹き島國なるが上、巍峩たる山系は海岸線に並行し國の中央に連亘するを以て、若し夫れ鋸を把り日本國土を切割せば、其の横截面は三角形を作さん、而して河の泉源は大概三角形の頂邊に在り、以て急劇なる斜面を兩方(一は日本海に、一は太平洋に)に直瀉し下れば、國に長河川なきは固より然る所。

(二) 河の大小

世に[大河]、[小川]と謂ふ、抑何に準據して之れを謂ふか、河道の長きものは、我

河の長短は河の大小と準據せず

亞拉比亞の河道

馬來半島の河道

灌域の大小は河の大小と準據せず

西比利亞の諸河系

印度支那半島の河

支流の多少は河の大小と準據せず

黃河

れ其の「長河」たり「長川」たり將た「長江」たるを聞く、短きものは、我れ其の「短川」たるを聞く、河の長短、以て河の大小を準據するに足るか、亞拉比亞の河道は長きもの多し、而かも一歲の强半は水あるなし、以て「大河」と稱ふべきか、馬來半島の河道は擧げて短し、而かも幅廣くして內には水常に滔々汩々す、以て「小川」と目すべからず、此の如くなれば、河の長短、未だ以て河の大小を準據するに足らざるを知る、一河系の幹流長く支流の多く且つ長きものは、我れ其の「灌域」の大なるを聞く、一河系の幹流短く支流の少く且つ短きものは、我れ其の「灌域」の小なるを聞く、灌域の大小、以て河の大小を準據するに足るか、西比利亞の諸河系は廣寞無邊、而かも所在は降雨絕些にして水量少々、且つ年內多分は氷封して流動せず、印度支那半島の河は其の灌域なる西比利亞諸河の十の一に過ぎず、而かも所在降雨頻劇にして水量多々、且つ年內滾々として恣に流動す、此の如くなれば、灌域の大小、未だ以て河の大小を準據するに足らざるを知る、支流の多少、以て河の大小を準據するに足るか、黃河は長サ一千五十里而かも其間の支流僅に指を屈して數ふるに過ぎず、ライン河は長サ三百二十里而かも支流一萬二千條、

ライン河

イザル河

水量一時の多寡は河の大小と準據せず

日本の河

イザル河は多惱河三十四條の支流中の第四位に過ぎざるもの、而かも更に支流を受くる無慮千二百九十三條、此の如くなれば、支流の多少、未だ以て河の大小を準據するに足らざるを知る、河の幅廣く底深く水の塡てるものは、我れ水量の寡きを聞く、幅狹く底淺く水の瘦せたるものは、我れ水量の寡きを聞く、水量の多寡、以て河の大小を準據するに足るか、日本の河の如き、季候風の印度洋、支那海を經て北上するや、降雨頻劇、所謂

鈴鹿川八十瀨もおなしいはなみの　春滿

音になりゆくさみたれのころ

亞拉比亞の河

の實際あり、而かも一年秋高く冬近きや、水涸れ沙白く、乃ち

へるたけは減て澄けり秋の水　篁路

の風情あり、亞拉比亞の河亦た季節に隨ひ水量の推移殊に劇甚なるを見る、此の如くなれば、水量の多寡を一時瞥見し未だ以て河の大小を準據するに足らざるを知る、既に然り、河の長短、灌域の大小、支流の多少、水量一時

河の大小の準據

大河　小川

長川河と大川河、短川と小川と混一すべからず

の多寡、悉く以て河の大小を知る能はずとせば、世の「大河」と謂ひ「小川」と喚ぶ者、古往今來、抑何に準據せしや、詩家、歌客、文人は可なり、特に怪む、歐米の地學家と號ぶ者、亦た漠乎として「大河」「小川」の稱を踏襲し、其の準據を確立せず、恬然却て自から怪まざることを、是れ度量衡なきと同一般、千歲の沒理學、寧ろ此の如きものあるか、悟り得たり、河の大小の準據は其の灌域と其の河口に吐出する水量一個年分との比例に在り、比例の大なるは「大河」にして小なるは「小川」なることを、試みに甲は灌域百方里にして一個年吐出の水量百萬石、乙は二百方里にして四百萬石、丙は三十方里にして九十萬石とせんか、各比例たる、甲は一千、乙は二千、丙は三千、故に丙は大河、甲は小川、乙は其の中間に在るものとす、斷定として語を東西の地學家に寄す、「長河」「長川」將た「長江」と、「大河」「大川」將た「大江」と混淆するなく、「短川」と「小川」とを同一看するなく、河の長短と大小との間に歷々たる巨別を劃せんことを、此の如くすることなく、千歲の沒理學、無標準、無根據、以て長へに滿足せば、焉んぞ「河」に關する學問を啓發せしむるに足らんや、眞個に望む、

大河の所在

大河所在の定則

同緯度に於ける大河の所在

大河所在の定則の變移

河の大小の根據や確立す、是に於てか問ふ、大河將た寰宇の何の邊にか多なるやと、曰く、一般に赤道線に愈近くに隨ひ益大河の存在するものとの語を以て定則とすべきことを自信す、何となれば赤道線に近くに隨ひ降雨頻劇にして、假令蒸發力の猛烈なるにもせよ、河口に吐出する一個年の水量多々、兩極に趨くに應ひ、降雨絶些にして、假令蒸發力の遲緩なるにもせよ、河口に吐出する一個年の水量少々なるを以てのみ、同緯度なりとせんか、大河は第一に島、第二に半島、第三に太陸に存在す、是れ亦た一個年雨量の多寡に準據し、大概島には降雨最も頻劇に、次は半島、次は太陸なればなり、東印度群島に第一流の大河あり、印度支那半島に第二流の大河あり、印度に第三流の大河あるは、正に之れを證左す、定則は此の如きも、其間變移なきにあらず、若し夫れ河道に湖瀑布、氷河あらんか、是れ流勢を儲溜し、隨て河口に吐出する水量を多からしめず、亞細亞、歐羅巴の河道には氷河あり、亞弗利加の河道には湖瀑布多く北亞米利加中部以北の河道には湖、澤横はる、是れ河口に吐出する一個年水量の割合に多大ならざる所因、

河の人生に大關係ある理由

(五) 河と人生

淡きこと水に似たりと、逝く者は此河の如しと、然れども河豈に此く無意味なるものならんや、上下五千載、東西九百萬方里、盛麗の人物は河の灌域に聚り、雄富の邦國は河の溪谷に興り、通都廣邑は河の濱に建つ、河は地の經緯なり、又た社會の經緯なり、社會の理勢は全く河の流勢と神契默會するもの、吏眼千秋、太塊の上に立ち、先づ河に向ひて映し來れ、世の治亂成敗、人種の隆替消長は瞭々火を睹るより炳かならんとす、乃ち溯りて「河と人生」を窮めん哉、何が故に然るか曰く、

(一) 河の所在は坦平なり。
(二) 河の所在は肥沃なり。
(三) 河の所在は交通に便なり。
(四) 河は航運に利す。
(五) 河は灌漑に資す。
(六) 河は水力利用に供す。
(七) 河は諸般の生業を授く。
(八) 河は雜多の便宜あり。

河の所在は坦平なり

河は太塊の掃除人なり

(一) 河の所在は坦平なり

太塊の上、幾多の破壞的勢力あり、雨や霜や氷や、是れ土地を溶解するもの、風や太氣や、是れ土地を洗削するもの、伏流や是れ土地を崩墮するもの、農人の犂鋤や、是れ土地を游離せしむるもの、草樹や蘚苔や田鼠の類や、是れ土地を穿鑿し潰壞せしむるもの、這般幾多の破壞的勢力は造次顚沛だに運動を休止せず、爲めに太塊は時々刻々に其の高サを殺がれ、時々刻々に平かならんとす、而して河は這般破壞的勢力の結果として出來せし沙泥を浚へ、且つ雨潦、惡水、汚穢物を抱容して去り、千年萬年、憩はず倦まず、之れを負擔して下り、骨を折りて中流以下に運搬す、要するに河は太塊の掃除人なり、而かも無賃銀にして荷の重キを怨まず、半時間の煙草休ミだにせざる掃除人なりと觀ずれば、太塊の上に在る予輩人類たる者、如何ぞ河に對して滿腔感謝の眞心を捧げざるべけんや、想ふて此所に到る、我れ頓に水廟に謁し柳蔭に跪きて簫を吹き鼓を鳴らし肅拜以て河伯に賽するの念を感じ來る、然れども河亦た自から其の勢力を恃む者、何すれぞ他の破

河の灌域地と一尺の厚サ浸蝕する年限

河の地球上に於ける絶特の大職責

壊的勢力のみの恣に太塊を平ぐるを看了せんや、己れ亦た激昂して所在の岩を浸蝕し、土地を平らげ、且つ行業の徒らに破壊的のみならざるを證左せんとし、沙泥を中流以下に沈澱堆積し、以て絶大なる新陸地を經營す、而して這般の新陸地や、固より曠濶にして坦平砥の如きもの、蓋し河の其の灌域地を平均一尺の厚サ浸蝕する期限は（チャールス、ゲッドスン氏の所説に據り換算せしもの）

ミシッピー	一、五一五年	ドノー（多瑙河）	二、二三〇年
コス（蘇格蘭）	二、三九五年	ローン（佛蘭西）	二、四一〇年
ポー（伊太利）	二、四七一年	ガンヂス（印度）	二、七五九年
黄河	三、三五五年	平均	二、四四七年

即ち一尺を浸蝕する期限を大概二千五百年とせんか、地球上の陸を敷き延ぶれば平均二千二百四十尺の高サなれば、河は今後五百六十萬年にして太塊を些も凸凹起伏なき茫々の一大平原と渾成せんとす。乃ち知る、河の地球上に於ける絶特の大職責は、實に縱線的に起立する陸をして地平線的に敷衍せしむるものなるを、況んや河の爲めに坦平なる新陸地の經營されたるもの、河口所在のみに於てすら延緣數千里に至り、ガンヂス及

カンヂス河及アラマプートラ河の三角洲ミシッピー河の三角洲ナイル河の三角洲黄河の堆積崇明島

東京の三叉所在中洲

ブラマプートラ河の三角洲は五千方里、ミシッピー河の三角洲は二千四百方里、ナイル河の三角洲は千六百方里ならんとす、黄河の如き、些々三旬にして十一町四方高サ二十間の洲渚を築き、楊子江口の坦平なる崇明島の如き、彼の明の世、方孝孺が慨然として燕王に屈せず義を取り仁を成した る頃には潜みて水底に伏在せしも、今や面積六十五方里、無慮五十餘萬の生靈を其上に滋殖せしめ、崇明縣を建て、儼たる縣治をなし、長江の口を控 禦する一雄鎮となりぬ、何ぞ必しも外國の大河のみならんや、夫の

瞋佳人、佳人顰、太守嗔、妾身任君殺、妾身任君活、妾身既有阿郎在、妾心不可奪、翼髮在手亂如絲、木蘭舟中斫娥眉、遺恨不知深幾尺、三叉之水終古碧。

てふ三叉所在（東京）如き、中洲（ナカス）（東京）の如き、皆な墨田川の作したるもの、中洲の枕流館上、淺酌低唱の時、三叉に對して一杯を佳人の芳魂に酹する者、請ふ更に餘瀝を澤水に灑ぎて河伯の德を頌せんか。

叙曰、水之爲德、大矣哉。

河の所在は肥沃なり

沖積土の肥沃

北米二十餘河水の含有物

歐洲三十六河水の含有物

テームス河水の含有物

ナイル河水の含有物

(二)　河の所在は肥沃なり

河は沙泥を抱き流下して之れを隨所に沈澱堆積す。沈澱堆積に依り經營されし新土壤や、細粒疎鬆にして能く草樹菜蔬の根を深入せしめ、密に溫度を擁護し、最も植物の長育に資す。加ふるに這般の沙泥は土壤中の特に膏腴なる所謂「表土」を洗ひ削り、出來せしかば、沙泥自から莫大の榮養分を固有し、北亞米利加洲の二十餘河を分析するに、河水一千分の中、可溶分〇、一五〇四四、其中炭酸石炭〇、〇五六四一六あり、歐羅巴洲の三十六河亦た河水一千分の中、可溶分〇、二〇三三、其中炭酸石灰〇、〇九五九八あり（ロート氏及びビシニフ氏に據る）、英蘭のテームス河の如きに至りては、日々千六百八十二噸の可溶分を流出し、其中千百二十一噸は炭酸石灰なりと聞く。埃及（エヂプト）のナイル河汎濫の際、一立方米突の流水を掬り漂粉を査定するに（ミュンツ氏に據る）、

窒素（硝酸化物）	一、〇七（グラム）	燐酸	〇、四〇（グラム）	加里	三、六六（グラム）
石灰	四八、〇〇（グラム）				

又た河水六米突に入り一立方米突流水中の粘泥を査定するに（上全）、

硅酸	五三、〇七	礬土	一四、五七	酸化鐵	一〇、二一
加里	六、六七	苦土	一、〇七	炭酸石灰	三、一三
燐酸	〇、一九	有機物	二、八四	水	七、四一
計	九九、一六				

埃及はナイル河の恩養なり

炭酸石灰の多量なる諸河皆な然り、是れ粘泥をして疎鬆ならしむるの特効あり、石灰又た能く有機物を硝化せしめ以て酸素との化合を速かならしむ、加ふるに多量の加里あり、若干の燐酸あり、有機物あり、其他の化合物亦た齊しく植物に榮養する所、是を以てか埃及の地ナイル河の洪涵を享けたる部分は翠綠にして一面の茵の如く生意頻りに勃動するも、享けざる部分は滿眸磽确にして全般の風物黯黃色を帶び蕭條凄楚、兩々區劃の歷然たる一行人にして左脚は翠綠色を蹈み右脚は黯黃色を步むに至る。想ふナイルの精靈、五千載に洋溢し、歲時の豐登、民物の安樂、舉げて此の一水に依托す、宜べなり國人の此河に對し崇敬措く能はざることや。蓋し每歲初夏、上流アビシニヤ國に濕季到るや、降雨頻劇なるを以て、下流埃及の地は、六月下旬より增水し初め、十月初旬に及びて止み、其間四方を洪涵して上流より傳送し來れる沙泥を沈澱堆積し、爲めに好個の肥料を散布し、一

ナイル祭

河の所在は肥沃なり

歳三回の収穫あるに至る、會〻八月中旬、増水の坡隄を決し水の初めて溝渠に入る日來るや、國祭として日を慶し、昔時は盛粧せる少女を河に投げて犧牲とし、遺風幾千年、今に土偶を崇飾し花を裝ひ香を薫し、國都の太守衣冠束帶して之れを投げ、式典極めて莊嚴、了るや歡聲一時に起り、驢を驅るコプト人(埃及固有の人種)は、駱駝に乘る亞剌比亞人(埃及にて勢力ある人種)と相揖して「好水」を賀し、土耳其人(埃及にて統治者たる人種)は、生平の仇讎を忘れて希臘人(其數四萬あり)と相抱きて酣嬉し、吝儉なるアルメニヤ人(埃及にて商業上勢力ある人種)も此日に限り新衣を裁して、亦た貪嗇なる猶太人の賓客を接納し、政府の有司は増水の程度に準據して一歳租税の豫算案を制定し、國内の百戲は都城に競ひ集り、棕櫚樹蔭、婆娑たるの影下、蛇仕ヒ、手品師、音樂隊は場を設けて伎を鬪はし術を衒ひ以て日の暮るゝを知らず、夜に入るや、萬點の紅燈は洪水と映發して煌々晝の如く、滿城の士女熙然として歌ひ、婆然として舞ひ、河上無心の塘鷺、鷺鷥白鷺(埃及人此鳥を神視す)すら喜鳴するの觀あるもの固より其故なしとせず。

日本の「上田」の所在

日本の「上田」「上畑」なるもの、悉く河に延緣す、試みに之れを證左すべきか、

河系	田	畑	全國耕地との割合	地價
	町	町	對	圓
御物川及能代川	一〇〇、〇〇〇	三五、〇〇〇	二、六八	四三、九八五、〇〇〇
最上川	七四、〇〇〇	三四、〇〇〇	二、一五	三三、四四八、〇〇〇
信濃川	九二、〇〇〇	六四、〇〇〇	三、一〇	四三、九九六、〇〇〇
北上川	九四、〇〇〇	八六、〇〇〇	三、五八	四七、二四〇、〇〇〇
阿武隈川	七二、〇〇〇	四三、〇〇〇	二、二九	三三、六四五、〇〇〇
利根川	二八九、〇〇〇	二四八、〇〇〇	一〇、六八	一一五、八八九、〇〇〇
木曾川	一〇四、〇〇〇	六四、〇〇〇	三、三四	四八、八〇八、〇〇〇
淀川及大和川	一二四、〇〇〇	六二、〇〇〇	三、七四	五六、六〇六、〇〇〇
筑後川	八二、〇〇〇	四三、〇〇〇	二、四九	三七、六五五、〇〇〇
計	一、〇三一、〇〇〇	六七九、〇〇〇	三四、〇〇	四六一、二七二、〇〇〇

關東の平土と利根川

濃尼の沃壤と木曾川

日本全國耕地の三分の一强や實に以上の十一河に延緣し、夫の關東の平土利根川は、土田疇洞然として海の如く萬項の黄雲中より筑波の峯尖突兀として靈はるを見るは利根川に依り、「日本の倉庫」と稱ふ尾張、美濃の沃壤を構成せ

河の所在は肥沃なり

畿内の香川と淀川及大和川筑後米肥前米と筑後川秋田米出羽米と御物能代川越後米と信濃川仙臺米と北上川及阿武隈川

しは木曾川に依り、幾旬の膏田を沖積せしは淀川及大和川に依り、「五穀祠開香火叢て」ふ「筑後米」「香粒玉を炊くが如き」「肥前米」を穫了するは筑後川に依り、「秋田米」「出羽米」は御物川及能代川最上川の河系より、「越後米」は信濃河系の蒲原平原より、「仙臺米」は北上川阿武隈川の河系より産出し、其他

加賀藩百萬石の沃壤

中有龍蟠虎踞之都、元精鬱渤鍾秀標瑞、具百二之形勢、實爲蜻洲之雄鎮てふ金澤（加賀）は犀川・淺野川の沖積扇上に在り、松任、美川（仝上）は手取川の三角洲上に在りて、所謂加藩百萬石の沃壤膏田は悉く河の恩賚なり、況んや北方の新富源たる北海道は石狩河系の構成せし石狩溪谷あるが爲めに特に生氣を發動し、南方の新富源たる臺灣は花蓮河系の沖積せし奇萊平原あるが故に頓に多望に屬す、

石狩川と北海道

花蓮河と臺灣

天を磨するが如き筆を揮ひて斯土の爲めに河の豐功偉蹟を頌歌せんとするや、人或は頻年河水暴漲して人畜耕作物を毀壞するに慊らず、以て河を嫉視する者なきにあらず、而かも是れ近代の日本人が或は山林を濫伐し、或は姑息的の堤防を造築し、河に對する用心の輕忽なるを視龍神、河

河伯の警醒

河の恩惠の反證

伯の會、今人の近眼淺慮を警醒せん爲め、乃ち洪水を降し、ものならざるなきを得んや、而かも人畜耕作物が毀壞の甚大なるは、即ち河の恩惠に頼らん爲め多數民人の其の所在に聚合し來りたるが故にして、是れ却て河の效能の甚大なるを反證するもの、且つ夫れ日本の河たる、太陸所在と異り、沙泥を沈澱堆積するの程度急速に、大坂の安治川口の如き（内務技師田邊義三郎氏に據る）

日本の河は堆積急速なり

明治八年深十二尺の所……明治十九年深六尺……即ち堆積六尺
仝　深十三尺の所……仝　深八尺……仝　五尺
仝　深十五尺の所……仝　深十二尺……仝　三尺

八年に深サ八尺ありし所と十九年に深サ八尺ある所を測量するに、十九年の所は、八年の所より百間沖に出づ、即ち十一年間に百間宛沖に出づるの割合なり。

淀川川床層高の度

又た淀川床層高の如き、淀舊城の石垣に依り測算するに、築城後今日に到る三百年にして川床の嵩まる十二尺五寸、即ち百年間に四尺嵩まるもの（工師デレーケ氏の測量に據る）、之れをナイル河上三千年前の古碑と比數せんか、碑臺今や河の沙泥を以て埋まる九尺、即ち一千年間の堆積平均三尺となす、而して河

ナイル河堆積の度

河と人生　河の所在は肥沃なり　三十三

ミシッピー河堆積の度

米産國たる日本に對する堆積の恩恵

寰宇の大經濟

の堆積の全厚は四十尺なるを以て、其の此に到るは無慮一萬三千三百三十三年を經過せざるを得ず、ミシッピー河の堆積も亦た一千年間に三尺に過ぎずと。是れ畢竟日本國土の地勢たる、河源近くして傾斜急劇に、隨て浸蝕力猛烈を盡くし、沙泥を傳送する多量なるも、太陸や、河源遠くして傾斜も緩漫に、爲めに浸蝕力の遲々たるに因るもの、而かも米産を以て立國の經濟となせる日本に在りては、河の堆積急速なるは特に多謝すべき所、人は謂ふ、日本の如き小土、其の大河と稱ふるものすら、太陸所在のものと校較せば、眞個に溝渠一樣に過ぎず、何すれぞ日本に「河と人生」の干預あらんや、日本に在りて「河と文明の關係」を立說するが如きは、猶ほ樣に依りて葫蘆を畫くが如きのみと、而かも河の日本國土を利濟する此の如く深厚なるものありとせば、天賜の優渥なるに感激せざる者誰やあるぞ。之れを要するに、河は廢物たる舊土壤を轉換して有用なる新土壤を經營するもの、起廢回生の妙用は全く此中に在す、眞個に寰宇の大經濟。

金城靈澤碑銘曰、滋潤膏沃、涵養無竭。

園校一第校學農曉札

（內の原平積神川背石）

。ときこしで種蒔てり國と馬に中國の此頃年數十す甚ひ想。ゆ肥らゃ自羊牛しさんら蔬てしに發發貴

川内山の錦（秋の渓流）　松平樂翁

予が領中川うつてふ山ありつゝト盛なるころは人々見に行くことなり秋の紅葉は殊にすぐれたる景色なり踏州ありきて名山大川見たるもの此山の景色みては皆くたびろさぬる事なりたゞ二里許の間峨々たる山の間淵水を左にし右にして行くなり瀑布も水湯せざれば五六十ヶ所よりおちて山間の極るところに玉のすだれかけたらんやうなるたきありもみぢ見に行きたるが十歩にたちとゞまり五歩にみかへりしてその景色を賞しぬるが山へ深く入りぬれば彌〻奇景なりはては人々默してたゞもせずされば言葉もて盛賞するは淺かりけり

このさき善齋の者のことに山を好みぬるとつれゆきたるにあまりに感ずてまた明けの日行きたりきさるに「うちつゞきて行きたらば萬分の一は畫にもかき得てんと思ひたるがけふ見ぬればきのふよりげにまさりて筆の及ばざると知れり」といひぬ總て興によきものはほゝめはさしも思ほゆすして見るごとによくぞおもふ

河の所在は交通に便なり

道路

兩長河の直角と作るは交通と便にす

兩長河の反對して流るゝは交通に便なり

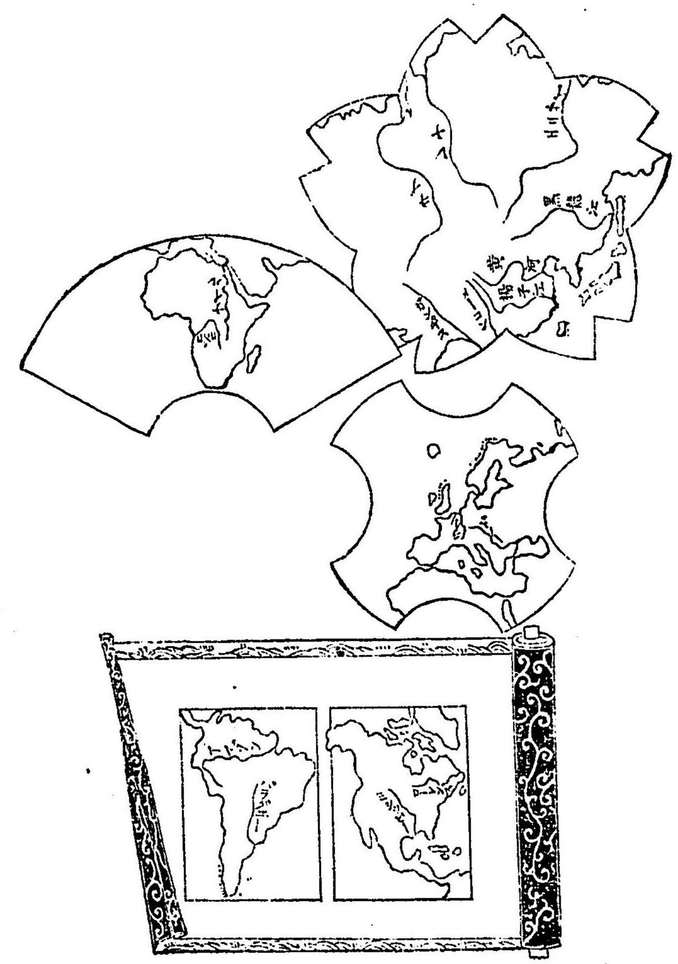
ミッスリー河

コロムビヤ河

鐵道街道

(三)　河の所在は交通に便かり

河の所在は坦平なり交通に利便なる想ふべきのみ況んや田疇は彌望として都邑墟落は其間に點綴す道路の相連絡する固より然り蓋し五太洲共に兩々の最長河は洲内に在りて直角を作りて流駛すれば輒ち人は東より入りて南に出づるを得亞細亞南北亞米利加東より入りて北に出づるを得亞細亞歐羅巴北より入りて西に出づるを得亞弗利加以て深く内陸蒼莽の間に出入し洪荒未闢の域に通達し得るは河道の直角を作す所因に依る更に兩長河の相反對して流駛するに至りては内陸を縱絶將た横絶するに偉大の利便を資し亞細亞洲の如き北より容易に南に出づるを得るは長河の北流すると南流するものあるを以てのみ北亞米利加洲の如き、ミッスリー河は太西洋系に流下して、コロムビヤ河は太平洋系に注入し兩々の河口相距るゝ一千里而かも河源の相距るゝ些々十五分時の歩行程乃ち兩河系に沿ひて鐵道を敷設し爲めに北米内陸の奥秘を闡明し利源を開發しぬ利根河口と信濃河口は相距るゝこと日本本州の殆



太陸の兩々の最長河は直角を作す

奥州街道

東北鐵道幹線の敷地

中仙道

中央鐵道幹線の敷地

本州の脊骨と縱貫せる道路

山陰山陽間の道路

日本本州最坦平の部分

んど全半、而かも兩河系の水源たる相距るゝ數里のみ、乃ち之れに沿ひて官道を開き、驛次を置き、依りて以て江戸の政令、太平洋岸の物産は北越及び日本海岸に流通したり。奥州街道は利根河系より阿武隈川、北上川に并行するものゝ謂、今日の東北鐵道幹線の敷地亦た是れ。中仙道は利根河系より木曾川に通ずるものゝ謂、將來の中央鐵道幹線の敷地亦た是れ。本州の脊骨を縱貫せる道路は越中の神通河系より木曾河系に隨ひ飛騨を經て美濃に出づるもの、山陰、山陽二道の間を連絡する道路は山陰の大川たる賀露川、日野川、將た江川と山陽の諸河系に從ふもの、日本海岸より太平洋岸に出づる最坦平の部分にして沿道遂に山嶺を超えず、宛然溝渠の看を做し、海洋の水をして今少しく高からしめば、本州をして二大島に分割するものは、兩丹の由良川より播磨の加古川に順ふ道路即ち是れ。

之れを要するに、大道長へに髪の如く引き去り、長亭短驛、車影馬聲絡繹とし、行人の輾ち謳歌して來往するは河の力のみ、政令、交誼、歴史の容易に通流するも亦た河の力のみ。河の人文に默托冥合するや其深サ幾萬尋。

河は航運に利す

北上川の航運

利根灌漑域は上野全部、下野七分、武蔵二分、下総九分、常陸以上の市一萬は前橋、高町は前橋、桐生、崎足尾、館利根、林口沼、足鹿、沼都宮、栃木、宇河、結城、船橋、千葉、土浦、岡佐原、銚石了

淀川の航運

信濃川の航運

富士川の航運

(四)　河は航運に利す

河の所在は交通に便なるのみならんや、河水の航運に利するは鴻濛の時よりす。謂ふ勿れ、日本は島國なり、航運に利する河なしと、而かも瀛筥長へに霜昊に嘯き、豐穰二十里の間を下り、三陸の嘉穀を滿載して石卷港(陸前)に漕轉し、港より布帆片々、太平洋の風に懸り、東京の海門に入りて、深川に荷揚げし、以て奥州の內陸と、太平洋と、東京と運搬上の連絡を洞通するは、北上川にあらずや、瀧域縱橫三四十里、上に市町を盛る百二十一、內人口一萬以上のもの十八、其間を結び其際を縫ひ、關東各州をして社交上に利害の交渉上に混じて一圈を渾成せしめつるは、利根河系の航運にあらずや、京攝間の運搬を幇助せる淀川十三里の瀛船航程の如きあり、日本海岸の米廩たる北越の中心を疏貫せる信濃川十七里の瀛船航程の如きあり、其他柔櫓聲々客夢を搖す緩流は固より短舸急湍を飛ぶ富士川の如きすら、信甲飽於魚鹽、而駿土足於材木、五種百物副焉、自是以來、緣河之民仰食於其利者、以千百數、不特人物牛馬省勞也、富士水碑銘序　黑川好祖

楊子江の航運

七、寧波港は重慶、宜昌、漢口、九江、蕪湖、鎭江、上海

にして、歲々輸出物價七萬餘圓、輸入物價四十三四萬圓あるに至る、河運の日本を利濟するもの無慮。

太陸に在りては、其の河系に條約貿易港を開く七、艦隊を率ゐて溯り得ること三百里漢口まで、洋航の瀛船を以て更に溯り得ること百九十里宜昌まで、瀧域十二萬五千方里、航行里程四千八百里、十一省の間を漕轉する楊子江の如きあり。瑞西、獨逸、佛蘭西、和蘭の四國を過ぎり、航程二百里幹流に所在せるケルン市まで洋航の瀛船を以て英京倫敦との間に定期航海を開通し、一支流に所在せるフランクフルト市まで一千噸の瀛船を往還せしめ、西部歐羅巴全躰の交通を安排せるライン河の如きあり。墺地利、匈牙利、塞爾維、勃爾加利、羅馬尼五邦の境を經、河系上に五邦の都城を立基せしめ、支流の航行すべきもの六十、其他大小の支流無數、爲めに水量多大にして年內同一樣に、墺匈一帝國の範圍內に於てすら乘客歲々四百餘萬、荷物二百七十五萬噸を搭載し、東部歐羅巴一帶の航運を壟占せる多惱河の如きあり。河系の航行すべきもの一萬四千里、洋航の瀛船、太西洋より直ちに

ウイン河の航運

ドノー(多惱河)の航運

聖ローレンス河の航運

ミシッピー河の航運

アマゾン河の航運

英の江港は英蘭の倫敦ニューカッスル、ブリストル、リヴァプール、蘇格蘭のエヂンバラ、グラスゴー、愛蘭のベルファスト、コルク

欧陸太西洋岸の江港は葡萄牙のリスボン、オポルト、佛蘭西のボルドー、ナント、ハーヴル、白耳義のアントワープ、和蘭のロッテルダム、アムステルダム、獨逸のブレーメン、ハムブルヒ、リューベック、ステッチン、ダンチッヒ等

河口に入り、溯ること九百里、深く内陸の間に入り、スペリオ湖上のアーサー港に達し、港より太平洋上のヴァンクヴァーまで鐵道千九百十五哩、以て太西太平兩洋の運搬を連絡する加奈太（カナダ）の聖（セント）ローレンス河の如きあり。多雪凛寒の方土と椰樹翠にして滴らんとする方土とを連絡し、温帶の產物と熱帶の物產とを結串するミシッピー河の如きあり。河系の航行すべきもの二萬里、太西洋上の河口より南米太陸の富饒多產なる部分を横絕し、迢々一千里、直ちにアンデス山下まで航行し得るアマゾン河の如きあり。

英吉利の河は太陸の河に較れば短小而かも水源高崇ならざるを以て、流勢平靜にして遥々深サ到る處均一に、且つ年内些も封氷せず、河口は底深き江港を鑿ち、海潮上流まで遠く差し込むを以て、洋航の瀛船直ちに内に溯り得。蓋し五洲の百穀萬貨、英國に輻湊塡溢するは、其河の形勝に賴るもの多く、經濟上より觀下せば、其の價値や太陸の大川、長江の上に在り。歐羅巴太陸太西洋岸の河口も亦た洋海の潮浪猛烈なる爲め、上流より倚送する沙泥を洗ひ浚へられ、且つ所在の土壤を削り取られ、爲めに幅廣く底深き江港を鑿ち、特に船舶の錨泊に恰好せしむ。歐洲太西洋岸の通商貿易熾盛に、舳艫鱗次し、帆檣林立するは、主として江港の多在するに因る。

運河

利根運河

支那の運河

宋人李敬方詩あり、汴水通淮利最多。生人爲害亦相和。東南四十三州地、取盡脂膏是此河。と。蓋し諷刺に出づと雖も、運河の萬世に功ある掩ふべからす、皮の詩可にして、李の詩不可。

運河

を鑿ち、河水を疏導し、以て尋常航運の外に、舟楫の便に利し、交通の用を興すもの多く。日本の如きは、航行運河の長大なるものすら、夫の本利根、新利根二川を連絡する利根運河二里許に過ぎず。然れども支那に在りては、浙江、江蘇より山東を經て直隷省に到る大溝渠三百二十五里、支渠縱横、漕轉至便、南部支那の生意の勃動せるは全然之れに賴り、効益の絕大なる

汴河懷古　唐　皮日休

盡道隋亡爲此河。至今千里賴通波。若無水殿龍舟事。共禹論功不較多。

にして、隋の開皇、大業年間、初めて開鑿せしより、金、元、明、清の歷代北京に都せし者、糧餉を南部多米の地方に需要するや、皆な海路の險を避けて水路を此の溝渠に取り、千三百年の間、河南河北の有形無形の交誼を緊密に連絡し、自から政治的大勢力と化成せる大運河の如きあり。歐羅巴洲に在り

太西洋と北海間の運河
北海と地中海間の運河
地中海と太西洋間の二運河
西歐と東歐と太西洋と北海間の運河
太西洋系とバルチック海間の運河
バルチック海黑海間の運河
米國の運河

ては、セイン、ライン二河の間に運河を鑿ちて、太西洋と北海とを連絡するあり。ライン、ローン二河の間に運河を鑿ちて北海と地中海とを連絡するあり。ローン、セイン二河の間に運河を鑿ちて地中海と大西洋とを連絡するあり。地中海より直ちにガローン河の上流に運河を鑿ちて太西洋と連絡するあり。ライン、多惱二河の間に運河を鑿ちて、西部歐羅巴と東部歐羅巴、太西洋系と黑海とを連絡するあり。エルベ、オーデル二河の間に運河を鑿ちて北海及び太西洋系とバルチック海とを連絡するあり。ヴィスチュラ、ブリペット、(ニーペル河系)二河の間に運河を鑿ちてバルチック海と黑海とを連絡するあり。北米合衆國にては、イリー湖東を決鑿してハヅソン河(コロンビア、ルヴ新約克港あり)に疏導し、以て人煙の稠密なること全聯邦戸口の十三分の一を占有しながら而かも麥作の些少なる全邦收穫額の三百七十分の一にすら到らざる東部各州に向ひ、西部各州より麥、麥粉を漕入する七個月間(一年中運河の氷封せざる間)に八百七十五萬石、以て貿易製造業の燥盛なる太西洋岸に對し、農利の饒々たる西部新開地方の土產を送附し、初めて東部人の食卓に好個の麵包を上らしめ、有無交換の途能く洞通して、東西の利害を一髮の如き溝水中に調訂するイリー運河の如きあり。其他天然の運河に至りては、アマゾン河系とオリノコ河系とを連絡し、引きて南米內陸の中心と北部海岸とを連絡するカシキアレー河の如きあり。之れを要するに、河は其の所在の陸上には交通の便に資し、水上には船舶を往還せしめ、河口は錨泊に供へ、更に運河に疏導して運搬の用を擴充し、以て東西を連絡し、南北を結串し、各都邑の間を縫ひ、異風土の際を繫ぎ、塞地と熱地とを統率し、利害の衝突を調訂し、有形上、無形上に世局の進運を振興するもの、或は曰ふ、近代鐵道大に開け、交通の機關茲に完備す、復た河運の用あるなけんと、焉んぞ知らんや、河運は、賃料の低廉なるが故に、需用遂に止まず、利根、北上、淀の滊船運賃は滊車の半額以下、多惱河の滊船運賃亦た滊車より下り、ミシッピー河の如きは、滊船運賃實に滊車の三分の一に過ぎざるが上に、一隻の曳キ船にして三十二隻の小舟を後に率ひ、無慮二萬噸の荷物を一回に搭載し來るに至る、假りに之れを滊車を以てせんか、

天然の運河カシキアレー
河と交通、運搬

十噸入りの荷物車二十輛を連れたる列車一百行を要するもの宜べなり其の航行季節八個月間の運漕高は沿域に開通せる三條の鐵道幹線の合計運輸高より多量なることを知れ河運は補助的交通機關として鴻利あるのみならず亦た鐵道會社をして運輸上の利益を壟斷せしめず競爭の爲めに滊車の賃料を愈引き下げしめ以て社會交通の途を安排せることを假令此河をして帶の如くならしむるも河運の用と功は遂に廢せず。

大空にあらぬものからかはかみに
星かと見ゆるかゝり火の影　貫之
わたり來て末たとゝしく筑波かは
伊佐ゝの橋に暮るゝ夕くれ　道興
さしわたす小舟よふなる聲はかり
のこりて暮るゝ淀の川つら　蒿蹊
浪花津に諸國の米や冬こもり　津・富

竹添光鴻北支那に遊び論ずて曰ふ「灌漑之制。千古治水之要。亦千古治田之要也。若使(中略)濤洫縱橫相接。承以澤則下澤則疏。洩以海則高澤則決。溝洫則供灌漑。溝洫則挑土。以資養之。使厚之。使深之。使可灌之者。一淺一深。水之可灌者。埃及人比亞拉比亞山側起階段以宅力耕之民。細亞人比亞拉比亞人比亞ニチヤンヤ、ペルシヤ、アラビヤ、ペルスチンの人民。支那人之要。埃及人之要。細亞人之要。ペルスチンの人民之要。支那人之要。皆以灌漑爲最。」

(五)　河は灌漑に資す

古井田之制。夫間有遂。十夫有溝。百夫有洫。千夫有澮。萬夫有川。川者水之滙也。萬夫之所恃賴也。旱則川之水可由澮以入於洫。由洫以入於溝。由溝以入於遂。而田不病燥。溢則遂之水可達於溝。溝之水可達於澮。澮之水可達於川。而田不病濕。秦人盡壞其制。後世莫能復(中略)。水利不興。則地寶不登。即有蠶來牟稷黍諸旱穀。而所入不足。以應長吏之追呼。於是有棄田不求直。而無一人受者。而欲募民墾荒興水利。其誰應之哉。　清　許承宣

と、河水を引き秩序的に灌漑の用に資するは二千五百年前の支那周代より然り。獨り支那のみならんや、太古埃及・シリヤ・小亞細亞の諸邦往々之れを施行し、特にパレスチンは、因りて以て雄富の疆土と瞻仰せられ、猶太人の此國を征服するに至りて溝渠を毀ち溜池を埋め爾來灌漑の制を廢弛せしより、遂に赤裸々の瘠土と凌夷せしとは古史の稱ふる所、其他アルメニヤの如き躁暴なる降雨季節の外は降雨絶無なる地方、亞拉比亞の如き降雨極些なる地方に在りては古來此制亦た最も行はれぬ。印度は農作物

に云ふ「梯田」は墨山隴爲田、層起階級一と。如ミオ圖會、駱繁錄亦た「梯田」の語あり、周亮工國小記の「砌田」亦た同意、即ち支那に古より此法ありと。英語のタレース・カルチヨンヴエーシヨンも亦た是れ印度の灌漑、西班牙の灌漑

伊太利の灌漑

兩三種ありしのみ、而かも近代に到り、古來の溝渠を興復修理し、ガンヂス、ジュムナの兩河水を疏導して灌漑に資せしより、諸般の農作物は優に長育し、今や本國英吉利の無量なる需用に供給し餘りて之れを外國に輸出し、最瘠薄最貧瘦の州郡すら五六十年前より頓に地力を蘇生し、新都邑村落の勃々として興起するに至る。西班牙は羅馬人占領の頃よりエブロ河の流水を灌漑の用に資し、亞拉比亞人占領の間亦た專ら力を之れに用ひ、降りて現今に到るまで最も秩序的に行ひ來り、毎日早天、用水の所有主は競賣を以て農夫に汲み渡し、農夫は前金を以て當日入用丈ケの水を獲るを恒例とするに至る、聞く此國の米、桑、蜜柑、果物類、花樹類の豐肥を以て四隣に鳴るは全然灌漑の力に在り、國内一方里の平均人口は二百十人に過ぎざるも、灌漑法の完成せる地方には四千二百十人ありと。伊太利は灌漑に賴りて潤利せし國土の隨一にして、ロムバルデヤ州の如き、何等の農作物と雖も悉く之れが恩惠に潤はざるなく、ピーモント州の如き灌漑の制ある地方と制なき地方とは人口の增殖二十年間の平均毎一萬人に付百三

ルーメリヤの灌漑

滊太利の灌漑

日本の灌漑

灌漑の用

灌漑の利益

十九人と八十一人との差あるに至る。ルーメリヤには、土壤輕鬆の所は乾燥して荒沙一帶に敷き、濕潤の所は雨潦停滯して時疫盛行し、四面耕種の施すべきなく、無人の境たりし二州ありしも、大溝渠を鑿ちて河水灌漑の制を設けしより、往時の空原曠澤も今や全歐洲中なる豐饒の部分、人口稠密の部分と化醇しぬ。濠太利亦た灌漑の恩眷を受けたる所、豈に外國のみならんや、日本の如き米產國にては、灌漑の用、特に偉大深厚なるを見る。

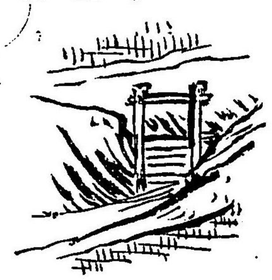
想ふ肥料の用は地味の缺點を補充するに在り、灌漑の用は氣候の缺點即ち雨量の不足を補充するに在るもの。之れを要するに、河水を疏導し、灌漑に資せんか、(一)水の供給殊に整齊恰好に、不時の增減あるなきを以て、雨量の多々なる地方に於てすら、猶ほ且つ農作物の收穫を增殖する事、(二)河水は一般に雨水より營養物を多量に含有し且つ之れを適度に配布するを以て、多量の肥料を施さいるも、收穫を增殖する事、印度にては、同一の地方にて灌漑するとせざるとにて、收穫に劃然一倍の增減あるが如き即ち是れ、(三)水の汎濫に依り土壤中の有害分を洗脫し、地味を改善し得る事、(四)劣

灌漑の間接の利益

等にして利益少き農産物しか長育せざる所に多利多益なる物を生産し得る事、(五)氣候にして適宜なりせば、灌漑せる地方には終歳耕種收穫し得る事、即ち米國カリフォルニヤ州の南部、アリゾナ州の西部にては、一個年に二月間の外は耕種收穫し得、能く一季間に五回苜蓿を苅取り穫るに至り、亞弗利加のアルヂェリーにては馬鈴薯の收穫一年三回あるに至るが如き即ち是れ其他間接の利益に至りては、溝渠あるが爲めに水の排注宜きを得、爲めに(一)濕潤なる所は輙ち乾燥せしむべく、以て舊來一回の米作に止る所は、秋收の後更に畑地となし、冬春の播殖に供へ得べき事、(二)濕地を乾燥するを以て、有害瓦斯の發上を杜絶し、所在民人の衛生を益善する事、是れなり。河水灌漑用の潤利や噫亦た大。

はつせ川なかるゝ水の瀬をはやみ　よみ人しらず
井てこす浪の音のさやけさ

麥田菜隴倚河畔、無限春風暑僅消、綠蔭夾路墓村遠、人騎駱駝過小橋。埃及雜咏　中井櫻洲



河は水力利用に供す

關東一の「金持ち村」

日本に於ける水力利用

(六)　河は水力利用に供す

河を引きて水力を利用するは人生經濟の一途たり、若し夫れ小は水鄉の人家、桔槔の聲起り、一上一下、以て日に一二俵の米を搗く所より、大は雷震霆疾せる幾百丈の瀑布を拉して巨萬馬力の電氣を霍發するに至るまで、効能の絶大なる寧ろ測るべからず。東京の城北、玉川上水附近の各村邑たる、灌漑の餘水を引きて水車を設け、就中拜島村の如きは、幅些々六尺未滿の小溝渠流通するに過ぎず、水車の直徑亦た八九尺を出でず、而かも或は三間に一を架し、或は十間に二を架し、其數幾多、能く水力を利用するの結果は、國村の富裕を致し、關東唯一の「金持ち村」と稱へらるゝに至る。水力利用の効能絶大なるは渾圓球上皆然りと雖も、特に日本の如きに至りては、國土の地勢幅狹く丈ケ長く、而して巍峨たる山系は國の中央に連亘すれば、到る處に瀑布、瀨湍騰沸し、河水の流勢亦た猛烈雄快に、乃ち頻に水力を利用して大工業を恢弘するに足るもの、論ずる者あり（水力學專門家清水政次郎氏に據る）

水力使用の簡便なる、費用の低廉なる、蒸氣力使用に比すれば、少なき

は十分の一より、多きも三分の一に過ぎず、而して水力使用は、其費用の廉なるにも拘はらず、反つて費用多き瀛力使用に優る點五つあり、

一、瀛力使用の如く瀛罐破裂するが如き危險なきと

二、機關手火夫を要せざると

三、黑煙を吹き散らし近傍に迷惑を及ぼさゞると

四、石炭を要せざると

五、機械運轉を始めさするも、或は之れを止むるも、只水門の手柄（ハンドル）を一二轉せば、直ちに意の儘にするを得、瀛力使用の如く、動力を得る迄時間と金を要せざるなり。

我國の地形を按ずるに、全國到る所水力を利用し得べき箇所に富めるは、歐米各國に多く其比を見ざる所、實に將來殖產興業上の天賜と謂つべきなり。

今其一班を示せば、我國中に放棄しある瀑布河川等の水力を利用せば、大略三百萬馬力位を發生せしめ得るは蓋し容易なり、而して若し瀛力を以て同一の馬力を發生せしめん乎、其石炭代のみにても、一晝夜五拾四萬圓、一ヶ年にては實に壹億九千七百拾萬圓の巨額を消費せざるを得ず（今一馬力に付一晝夜要する石炭平均六十ポンドとし而して石炭壹萬斤の代價を三拾圓と見積り算せり）其他瀛力を使用せば、機關手火夫等を要す、其等の給料を算入するときは、三百萬馬力を發生せしむるには少くも一ヶ年三億萬圓以上の巨額を要すべし、而して之れに反し、水力を使用せば、上陳の如き費用殆んど皆無なり、以て水力使用の利益ある一班を窺ふに足るべし。

日本立國の大根本

和國強國の根本

と、蓋し水力利用は地勢上、遂に日本立國の大根本たるや必然、而して今や到る處に瀑布、河流、湖水の力を利用するの事起り、漸く一世の大趨勢たらんとす、想へば和蘭や、歐西に偏在せる瀛爾の國土を以て能く五太洲に無數の領國を占有する根本は、全く水力の利用に歸因すとせば、誰か水力利用の絕大効能に感激せざる者あらんや。

落花深處蹈車忙、抖得溝渠水亦香、始識南州風土異、田疇三月已分秧。

佐賀途上。

(七)　河は諸般の生業を授く

河は諸般の生業を授く

菱採り

藻刈り

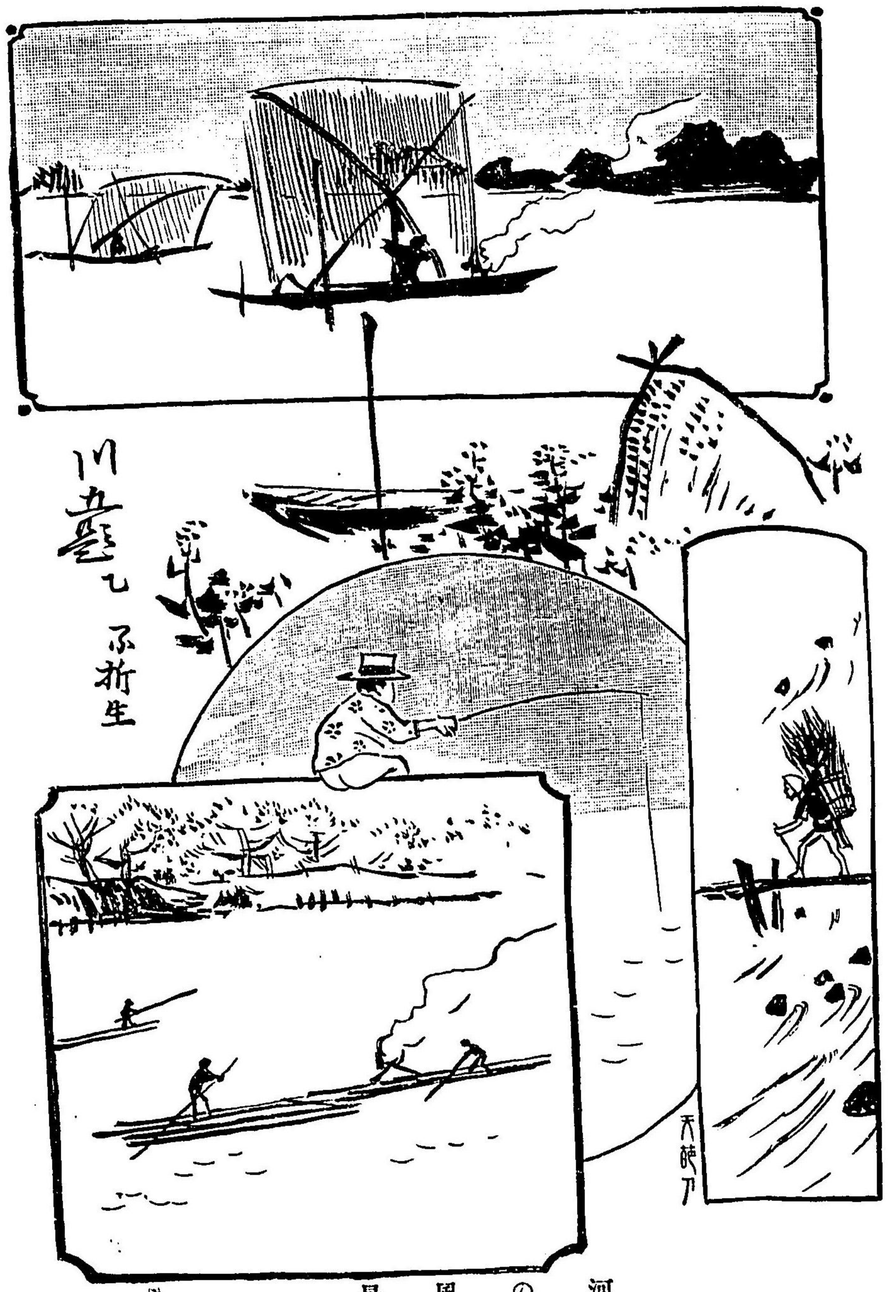
日本の淡水漁業

北米太平洋岸の鮭漁業

北米の白魚漁業

魚類に食料を供給す

此の柳蔭の下に小艇の蕩漾するは菱(食料用)を採るもの、彼の蘆花の側に短舟の上下するは藻(肥料用)を刈るもの、其他河は捕魚の爲めに萬千の民人に生業を授與する所。日本の如き、淡水漁船の數五間以上の者二百五十、三間以上の者四千百、三間以下の者三萬六千五百、合計四萬有餘に至り、鮭の漁獲たる鹽製にしたるものゝみすら一個年時に四百六十萬貫、鯖の鹽製二百二十七萬貫に上るあり。北米太平洋岸にては、コロムビヤ河(合衆國にサクラメント河(仝上)に、フレーザー河(英領コロムビヤ)に到る處鮭の漁獲多大、罐詰メ製造高一個年に四ダース入りの函一百萬個に至る。北米合衆國、加奈太の川河、亦た白魚の漁獲無慮、凍氷して之れを遠土に輸送する類亦た無慮。既に然り、河は諸般の生業を授與するのみならず、粉碎若くは爛敗せる有機物を抱容して流下し、之れを洋海中に注ぎ入れ、千年萬年、遂に洋海の水分をして自から肉汁一樣と成さしめ、以て無量の魚類に無量の食料を給供し來る。其の人生の生業に直接間接の利益ある眞個に大。



河の風景

急湍の危橋　四ツ手網曳キ　波シ場・　鰐魚(さす)釣リ　筏流シ

沼と湖

春夏秋冬

河は雑多の便宜あり

(八) 河は雑多の便宜あり

河や、或は氣候を調訂し、或は土壌を潤澤し、或は濕地を乾燥す、其他飲料として用ふべく、眺めて以て氣宇を清爽恢弘せしむ、其の便宜や悉くすべからず。

若鮎やかく變る瀬に住ならひ　卷阿
藻刈舟笹の葉はとに見ゆる哉　鷺水
いし川や瀬見の小川のきよけれは
　月も流れをたつねてそすむ　長明
富士かはのゆさけの水に我のみは
　すましとかすむ春の夜の月　契沖
漁翁夜傍西巖宿、曉汲清湘燃楚竹、煙消日出不見人、欸乃一聲山水綠、迴看天際下中流、巖上無心雲相逐、漁翁　唐柳宗元

河と人生

日本史（六）

天孫と大淀河系

鴻荒の世、天孫瓊瓊杵尊、日向の大淀川上流に宮居し給ふ、川は九州の太平洋岸なる隨一の巨流にして、上流には沖積層の肥沃なる平地を開展し、延縁して南は直ちに菱田川の沖積溪谷に連り、西は薩摩の國府平原と相接し、九州の南部に於ける最大平原を開き、地形優勝、東の方日向灘よりと、南の方有明灣よりと、西の方鹿兒島灣よりと、三方よりの中心に所在し、赤道海流の感化を享け、氣候殊に和煦温暖なるが上に、其の地質は霽敗せる火山灰の沖積より搆成するを以て、膏腹無比、眞個の天府たり、天孫の裔、此所に孳殖し、玉ひ、此所に雄富を稱へ、玉ひたるもの、偶爾にあらず、(此所より南に出で有明灣に到れば、檳榔樹の亭々として亂生する檳榔島あり、宛たる熱帶の風物)既に然り、天孫、大淀河系に孳殖して雄富を稱へ、玉ひ、力餘あり て雄心落々たり、尊の皇孫彦火火出見尊、英邁にして濶達の量あり、是に於てか中原を戡定し大に政道を弘恢し、玉はんとす、乃ち族衆を率ゐ東し玉

神武帝の東征

瀬戸内海は大河の如し

中原の戡定

橿原の宮都

平城即ち奈良

平安の宮都

ふや、當時陸上には行軍の道路とてあるなく、加ふるに所在草昧に屬し、糧餉を獲べきもの絶些、尊の舟師を率ゐて東し玉ひたるもの、亦た以て雄略の一班を證左するに足る、舟師進みて瀬戸内海に入る、内海は山陽、四國の間に開き、丈ヶ長くして幅狹く、海嘴は兩岸より四射八出し、島嶼は内に點綴し、さなきだに幅狹きに愈、益、狹まり、髣髴として大河の觀あり、船舶を以て恙なく渡行し玉ひしは皇祖の御稜威に因ると雖も、亦た地勢の與りて然らしむる所、既にして陸に上り玉ひ八十梟師を斬り、長髓彦を亡ぼし、戡定の事成るや、中原の大河系たる、大和河系と、紀川河系との中央たる、橿原に奠都し、以て天壤無窮の丕基を肇立し玉ふ、宜べなり神武の尊謚や、

爾來一千三百七十年、元明天皇の和銅三年、都を平城(奈良)に遷し玉ひしまで、歷代の天皇宮居を遷徙されしこと頻々、而かも其の所在や、淀大和の兩大河系の外に出づるもの一二、而して平城左右の京坊、亦た這般兩河系の搆成せし沖積層の上に建てたるもの、奈良の都たる八十四年、桓武天皇、天授聰達、頗る事宜の大體に通じ玉ひ、不易の都を山城の平安城(京都)に奠じ

國府の所在

利根河系と國府

戰國英雄の根據地

玉ふ城は淀河系の平地に立ち南日本を控扼するに好個の處豈に帝都の河系上に建つのみならんや地方政廳の所在たる國造國司の治所(國府)も亦た悉く河系上に建ち就中利根河系の如き上野下野總常陸の四國府を其上に立基せしめぬ要するに日本の上古史中古史は河の歷史なり戰國史も亦た河の歷史なり戰國群雄の根據地は齊しく河畔に在り

南部氏　秋田氏　佐竹氏　宇都宮氏　上杉氏　管領　千葉氏　結城氏　里見氏　北條氏　村上氏　眞田氏　木曾氏　齋藤氏　織田氏　朝倉氏　武田氏　德川氏　京極氏　淺井氏　宇喜多氏

岩木川　最上川　平久里川　津輕氏　最上氏　伊達氏　里見氏

馬淵川　北上川　御物川　久慈川　那珂川　利根川　筑摩川　根曾川　木曾川　九頭龍川　富士川　矢矧川　姉川　旭川　犀川　神通川　酒匂川　安倍川　雲出川　市代川　千代川

能義川　吉野川　大分川　菊地川　尼子氏　三好氏　大友氏　菊地氏　吉田川　太田川　那珂川　御笠川　筑後川　甲斐川　毛利氏　小貳氏　龍城寺氏　島津氏

木曾川　矢矧川　兩河系の沖積地と織田、豐臣、德川三氏

江戸　東京

の如し既にして本州の中央に延緣せる廣大肥沃の平原即ち木曾矢矧の兩大河系の構成せし美濃尾張參河の沖積層地を根據としける織田氏豐臣氏德川氏は其の勢力を膨脹し得べき範圍や他の小河系の構成せし平原より特に廣大なるを以て能く群雄を芟取して中原を控扼し遂に日本一統の丕基を成就す織豐德三氏の天下を覆たるは河の力に因る多々後德川氏日本の最廣大最肥沃の平原即ち利根及び幾多河系の構成せし關東平原の上に府を開きて幕政を敷き三百年の覇圖此所に成る所謂江戸是れ明治中興の當初今上皇帝鳳輦を江戸に遷させ玉ひ稱を東京と改め大に聖謨を宏廓し玉ふ以來日本帝國の國都となり政治上社交上の中心となり東洋恢弘の原動地たらんとす日本史は即ち河の歷史なり

(七) 朝鮮史

長白の連山は宛如たるアルプス山系、白頭山脈は宛如たるアペニン山脈、朝鮮半島の白頭山脈に頼りて建設さるゝは、猶ほ伊太利のアペニン山脈に頼るに匹似す、羅馬歴代の興亡隆替は伊太利半島の大河チベル、アルノ、ポーの邊畔に定決しき、乃ち朝鮮史の鴨綠、豆滿、大同、漢、錦、洛、東の六大江に交渉する宜べなり、北より指點せんか、白頭山系の西に馳り黄海に注ぐものは、鴨綠江、大同江、漢江、錦江たり、東に流れ日本海に入るものは、豆滿江、洛東江たり、檀君以來朝鮮三千年の生命は全く這設の江畔に在り、

朝鮮史は六大江の歴史なり

大同江 檀君 平壤

東國通鑑に曰ふ「東方初無君長、有神人降于檀木下、立爲君、是爲檀君、國號朝鮮」と、三國遺事に曰ふ「檀君都平壤」と、平壤一名王儉城、大同江畔に在り、

東史に云ふ「堯禹十八年、會諸侯於塗山、檀君遣子解扶朝禹」と

箕子

大同江水浸烟蕪、王儉春城似畫圖、萬里塗山來執玉、佳兒尚憶解扶奴、

柳惠風

と、周(支那武王、殷を滅するや、殷の族子箕子を朝鮮に封ず、一族及び殷の民

檀諸氏

樂浪郡

扶餘族

高句麗

從ふ者五千人と、箕子の子孫亦た平壤に都し、大同江畔の沖積平原に孳殖す、所謂「耕種殷人七十田」とは是れ、箕子東遷より五百二十餘年、四十一世の孫準否に至る、時に支那に秦末漢興の亂あり、燕人衛滿なる者、亂に乘じて起り、其黨千餘人と朝鮮に入り、準否を亡して國を奪ひ、平壤に都する八十七年、孫右渠に至り、漢武帝に亡され、漢、朝鮮を樂浪郡となし、十八縣に別ち、統治する九十餘年、所謂「樂浪城外水悠悠、誰識萩苴漢代侯」是れなり、樂浪城とは平壤、水とは即ち大同江、是より先き北狄に扶餘なる一族あり、長白山系の南麓に雄富を稱ふ、酋長朱蒙大志あり、其初め鴨綠江上流に居り、南下して大同江河系の沸流水上に都し(日本紀元六百二十四年)、頻りに四方を呑噬し、版圖膨脹して黄海より日本海に跨り、孫類利に至り國を高句麗と號ふ、東川王に至り都を平壤に移し、北狄の朝廷大同江の平原に覇を稱ふる數百年、後唐及び新羅の同盟軍に敗られ、高句麗七百五年にして亡ぶ、大同江の朝鮮の古史に干預する此の如し、宜べなり彼土の詩人、江畔に低徊して古今伏仰の感に禁へざるが如きあるを、而して平壤は宛も我が京都

政治上社交上産業上の中心

錦江

益山
馬韓

温祚

百濟

の觀ある所、豈に獨り歴史上の千預のみならんや、大同江平原は實に朝鮮北部の政治上、社交上、産業上の中心となり、半島の主産物たる人參、大豆、牛皮は此の平原より出づ、大同江や朝鮮の生命の大部分を構成す。

大同江平原の主權者箕準否の衛滿に亡さるゝや、涙を揮ひて六百年間の墳墓國を去り、其衆數千人と共に南に下る、愈下るや、氣候益和暖となり、風物人に可に、遂に今の忠清、全羅二道の間に到れば、錦江の平原は蒼莽として眼前に開展し、鳥歌び花咲ひ、土産も亦た饒多なり、輙ち復た故の墳墓國を懷はず、居を河系上の益山(全羅道に定め馬韓を攻めて之れを破り、自立して韓王となり、所謂馬韓五十四國は錦江の河系に盛榮を盡くすこと百七十六年。時に扶餘の一族中に温祚なる者あり、南に下りて錦江畔の熊津(忠清道公州)に居る、熊津は錦江平原の中央に在り、形勝雄偉、以て覇を稱ふるに足る、乃ち馬韓を擊ちて亡し、國を建てゝ百濟と號へ、江上に城き石壁の周圍一萬三千六尺、其形半月の如し、半月城に都し國を建つる六百七十七年、義慈王に至り唐及び新羅の同盟軍に破られ、宮女數百奔逃して江上

朝鮮西南方の富源

木浦開港問題

洛東江

辰韓
新羅

三國史に云ふ「鈍萱粹入新羅王與夫人都嘱王御出游鮑酒石亭。置酒樂。賊至獨狼狽不知所爲。侍從臣僚及宮女伶官皆陷沒」

釜山

の斷崖に登り、大巖の上より自から墜ちて死す「落花巖」とは即ち是れ、所謂「雨冷風凄去國愁、巖花落盡水悠悠」たる處、千古無恨の詩料を遺して百濟茲に亡ぶ、要するに馬韓、百濟の歴史は錦江の歴史なり、豈に史料、詩料に富膽なるのみならんや、朝鮮西南方の富は全く此の江畔に集積し、而して木浦は全羅道西南の海上に在り、所謂木浦開港問題は實に朝鮮南方の富庫たる錦江平原、靈山江平原の物産を利導せんとするもの。

朝鮮の南方は慶尚道あるを以て重し、慶尚道は洛東江あるを以て重し、朝鮮南方の政治、社交、産業の中心は全く江上に在り、古昔、辰韓、新羅の二國河系上に興り、新羅一千年間、覇業に、政治に、宗教に、建築物に、半島の最も光輝ある歴史は此の江畔に演出せられ、今日新羅の故都を訪ふ者は唯だ「三月初旬去踏青、蛟川花柳鎖冥冥、流陽曲水傷心事、休上春風飽石亭」の句を歌ふに過ぎざるも、朝鮮歴世の政治家、文人、詩客は齊しく此所より起り、商業貿易の活動も亦た此所に敏捷を極む、釜山は實に江口附近の海上に在り、其の開港場として東洋に重きをなすは一の洛東江あるが爲めのみ。

滿江
王都
高麗
松都
李成桂
朝鮮
漢城
鴨綠江と對清問題
豆滿江と對露問題

八道の中央に漢江あり、漢江の沖積平原は眞個の天府、正に朝鮮の中原たり、河系上の松嶽(京畿道開城府)に王建なる者あり、百濟、高句麗、新羅三國を破り、半島を一統し、國を高麗と號へ、松嶽に都する(所謂「松都」)四百七十四年、三十二世恭讓王、性柔惴、積代の疲憊遂に醫すべからず、其將李成桂、豪俠にして聲望一代を籠蓋す、遂に自立して國を朝鮮と號へ、漢江上の漢城に都す(我紀元二千五十二年)、現代の王室、即ち是れ、半島の現在に於ける政治上、社交上の中心は此の江上に據在す。

鴨綠江は支那との境界に駛る、故に過去に於ける支那との交渉問題は常に此の江上を舞臺としき、豆滿江は露西亞との境界に流る、故に未來に於ける露西亞との交渉問題は定めて此の江上より湧出す、過去、現在、未來共に朝鮮の活動は六大江上に在り、朝鮮史は全然河の歷史なり、朝鮮を研究せんと欲せば先づ其の河の形勢を指點せんか、

白頭山石磨刀臺、鴨綠江水飲馬無、
男兒三十未平國、後世誰稱大丈夫、　南將軍

支那史と歐羅巴史

(八) 支那史

黃河の河系十萬方里、楊子江の河系十二萬五千方里、既に日本國の面積に九倍し、歐羅巴の列國瑞典及諾威、丁抹、墺地利及匈牙利、獨逸、瑞西、伊太利、和蘭、比耳義、佛蘭西、西班牙、葡萄牙と地中海中の諸島嶼の合計面積に等しからんとす、人或は支那を以て亞細亞太陸の一隅に偏局せる一邦國となす、而かも廣袤の絕大なる、戶口の饒多なる、歷代治亂興廢の頻劇なる、之れを歐羅巴太陸全躰と比擬する何ぞ過當なりとせんや、春秋左氏傳、戰國史、三國史、南北史、五代史に於ける列國の分立抗衡は猶ほ歐羅巴太陸に於ける列國の分立抗衡に匹似す、唯だ支那の歐羅巴太陸の如くに長へに邦國個々に分立せずして遂に一邦國を構造するは、前者は山嶺交錯縱橫して其間に溪谷を開き、此所に個々邦國を發達して自から分立自治に便宜なるも、後者は莽々たる黃河、楊子江の兩河系、無邊無涯、遂に一統渾融に利する所あるを以てのみ、夫の數邦國に分立するを以て西洋史に重を置き、一邦

黄河と楊子江

南北に流るゝ河と東西に駛る河

支那史は黄河楊子江兩河系の破綻史なり

黄河と楊子江と風土の殊差

國を構造するを以て支那史を輕看するは畢竟瞶々の徒のみ。

支那は黄河・楊子江の兩大河系延縁するを以て一統渾融に利あり、而かも兩河や、實に南北に流れずして、東西に駛る、蓋し南北に流るゝ河は、熱氣候の地方と寒氣候の地方とを結申し、異物産の間を連絡し、能く利害の衝突を調訂す、東北に駛る河に至りては然らず、唯だ同一の氣候、同一の物産同一の利害を包容し得るのみ、遂に異風土の間を結申連絡する能はず、爲めに利害の衝突を調訂すべからず、故に支那や、歐羅巴太陸の如く長へに邦國個々分立せずして遂に一邦國を構造するも、機に臨み變に應じて黄河、楊子江兩河系の間に利害の衝突を來たし、歴史上の破綻を時々瞥見す、支那史を立論せんとせば、先づ兩河系の風土を稽査せざるべからず。

黄河は支那北方の代表者なり、所謂「北方之強者居之」なり、楊子江は南方の代表者なり、所謂「君子居之」なり、「雁度塞雲、馬嘶古道、崇山峻嶺、陡開大陽、曠野平林、煙火攢簇、樵斧耕鋤、隱約在目」と、是れ北地の太觀なり、「蝦房蟹舍、採菱捕魚、小舟、蕩漾來往濃陰之下、柳堤花塢、盡在春光蕩駘之中、水鄉人家、桔槔聲起、

黄河河系の風物

北人

牛背笛聲、兩々歸來、此耕田鑿井餘風」と、是れ江南の風物なり、黄河・河系は窮廬の如き天蒼々として四際に低れ、極目千里、高粱を植ゑ、日は高粱より出で、高粱に沒し、大行の山色微かに地平線を限りて餘嵐遠く中原を照し、會、白楊の水畔に斑點するも、他に植物の看るべきなく、風物單調一樣、時に之れを破るものは土人の穴居のみ、氣候は純乎たる太陸的にして、無涯の黄風塵を捲きて朔北より來り、乾燥にして些の水分なく、流水黄濁、飲むべからず又た洗滌の用に供すべからず、故に百多の事物華潔ならず、清雅ならず、生産は勞力の寡單なるもの耕種の簡易なるものゝみを撰擇し、生民貧窶困厄し、北部省城の殷繁は、南部一府城と比すべく、或は時に之より下るものあり、北部府城の繁庶は、南部一縣城と比すべく、北部縣城の繁庶は、南部一鎮と相比すべし、既に此の如く自然に逆遇せらる、故に北人は意思强烈豪健にして容易に屈せず下らず、實行を主として想像力に乏しく、燕趙悲歌、事を斷ずるや爲す有らずんば遂に已まず、骨相亦た長大にして隆準肉角、眼釣り眉昂がり、面貌黄黧にてし鬚髯髭々、宛として北方之强を顯

楊子江河系の風物

原人

黄河河系の基都

表す。楊子江畔は坦々たる平原延縁すと雖も、江は古生紀、中生紀地層の間を流駛し、江岸時に懸崖斗壁を見、翠巒碧峯處々に點綴して、風物單調ならず、氣候亦た和煦潤濕にして、草樹鬱蓊とし、生産饒多、加ふるに流水清冽なるを以て、百多の事物華潔に、家屋も雅趣多く、人物瀟洒纎巧に、且つ理想に富み、多感多恨、色白く、肉瘦せ、兩眼細く平かにして、鬚髯多からず、短身にして、音吐清朗なる處、正に南人の眞面目を現示す。

黄河・楊子江・兩河系の風土や、太殊差あり、其の歴史に、太殊差あるべきのみ、蓋し太塊上、原人の發生地は亞細亞太陸の中部に在り、漢族亦た崑崙山下の祖國を出で、楊子江上流は崇巒嶮峯重疊するを以て之れを避け、地利上、輙ち黄河の流に沿ひて東下し、歴代の帝王太抵は黄河河系に奠都す。

代	都	所在	黄河河系
三皇 太昊伏羲氏	陳	河南省陳州府	蔡河の岸に在り、蔡河は洪黄河に入る
三皇 炎帝神農氏	曲阜	山東省兗州府曲阜縣	泗水の南、洙水の北
三皇 黄帝軒轅氏	涿鹿	直隸省順天府涿州	拒馬河の右岸に在り、拒馬は白溝河に入り、兩淀を經て白河に入るも、古地圖と按ずれば運般の諸河は皆黄河の河系に属す
五帝 小昊金天氏	窮桑	山東省兗州府	泗水の傍近
五帝 顓頊高陽氏	帝丘	直隸省大名府顓頊城	黄河の古金堤の傍近
五帝 帝嚳高辛氏	亳	河南省河南府偃師縣	汾河の左岸、平水の北
五帝 帝堯陶唐氏	平陽	山西省平陽府	嬀汭水の傍
五帝 帝舜有虞氏	蒲坂	山西省蒲州府	東永河の傍
夏后氏禹	安邑	山西省解州安邑縣	黄河、楊子江の間、洪黄河の南に在り
殷	亳	河南省歸德府	洛河の北岸
周	洛	河南省河南府洛陽縣	渭水の南即ち右岸
秦	咸陽	陝西省西安府咸陽縣	渭水の北即ち左岸
漢 西漢	長安	陝西省西安府長安縣	前漢は西の方長安に都す故に西漢の名あり。後漢は東の方洛陽に都す故に東漢の名あり
漢 東漢	洛	河南省河南府洛陽縣	東漢の末、魏の曹氏、呉の孫氏、蜀の劉氏、三國鼎立し、呉は楊子江下流の建業に都し、蜀は上流の成都に都す
三國の一 魏	洛	河南省河南府洛陽縣	前晉は洛に都す故に西晉の名あり、後晉は楊子江下流の建康に都す故に東晉の名あり
西晉	洛	河南省河南府洛陽縣	西晉亡びてより隋に至る二百七十二年間、東晉、宋、齊、梁、陳の五代與り皆楊子江畔の建康に都し、黄河河系の建都史は此間中絶す
隋	長安	陝西省西安府長安縣	

黄河河系歴史の特色

唐	長安	陝西省西安府長安縣	唐亡ぶる年、後梁に拉かされ都を洛陽に遷す（黄河幹流の南即ち右岸、二世十七年にして亡ぶ）
五代 後梁	大梁（汴）	河南省開封府	四世十四年にして亡ぶ
五代 後唐	洛	河南省河南府洛陽縣	二世十二年にして亡ぶ
五代 後晋	汴（大梁）	河南省開封府	二世四年にして亡ぶ
五代 後漢	汴（大梁）	河南省開封府	三世十年にして亡ぶ（宋、汴に都する百六十六年、高宗の時、金人汴を陷る、帝南渡して揚子江上の揚州に幸し更に臨安に幸す、故に高宗以後は南宋の名あり）
五代 後周	汴京（大梁）	河南省開封府	金、初め上京（今の會寧）に都す、後其の北餘に在るを服ひ燕京（今の北京）に遷す、尋で蒙古の北より攻め來るや、更に南遷して汴に都す
宋	汴京（大梁）	河南省開封府	
金	大都（北京）	直隷省順天府	（黄河河系にあらざるも、黄河河系に延縁せる平原上に在り）
元	北京	直隷省順天府	
清			

即ち是れなり、蓋し黄河河系に王覇歴代の奠都せしは、南方に關する經營は比較的に些量にして、北狄に對する用意苦心の長へに纒綿し、勢ひ北方に據在せざるを得ざりしもの即ち是れ、而かも黄河河系に據在せし王覇歴代や、其の外界の現象に風動薫化せられ規模雄大、局勢壮淵、英雄の氣其

揚子江河系の奠都

間に磅礴し、眞個に俊鶻の雙翼を張りて朔北の雲を拂ひ汪々たる黄河の大平原上を獨り横絶するの觀あらしむ。

乾坤を一轉して揚子江河系に覩んか、揚子江上に奠都せし者は、

揚子江河系歴史の特色

代	都	所在	揚子江河系
三國の一 呉	建業	江蘇省江寧府	揚子江幹流の南即ち右岸に在り楚威王（戰國）金陵邑を置き王氣あるに因り金を埋めて之れを鎮す、秦亦た金人を燃む、故に金陵城の稱あり
東晋	建康	所謂「南京」	六朝舊城は秦淮を去る一里。秦淮口に桃葉渡あり。石頭山は江に臨む支那の文華風流の中心なり、六朝の名區勝蹟多く、行人をして低徊斷腸に禁へざらしむ
南朝 宋	建康		長髮賊の兵燹に罹ると雖も、南朝四百八十寺、多少の樓臺は尚ほ烟雨の中に隠見す
南朝 齊	建康	浙江省杭州府	（錢塘江口に在りと雖も、揚子江より延縁せる沖積の上に出つ）
南朝 梁	建康	江蘇省江寧府	（明、都する六十六年、太宗の永樂十九年順天府（北京）に遷す）
南朝 陳	建康		
南宋	臨安		
明	應天府（南京）		

即ち是れなり、蓋し揚子江河系に奠都せし王覇歴代や、其の外界の現象に風動薫化せられ、規模綺麗、局勢清穏、江南春曉の曲を聽く如く、着色秋江の

老子莊子の學、黑原の難題、浮屠の法談、宋明程朱の學、亦た啓發す

北人將た北狄と南人との確執

畫幅を展ぶるに似、所謂「六朝の雅致」「晉時の清談」「南朝の風流」「南宋の纖巧」「明代の瀟洒」皆此所に在り、夫の建安七子の文、駢儷四六の躰、此間に啓發せしもの自然たり、君や若し夫れ楊子江河系歷史の眞面目を悟了せんと欲せば、月明揚州の畫樓上、水晶簾外に琵琶を彈く人に向ひて問へ、琵琶を彈く彼女自身こそ揚子江河系歷史の權化なれ。

黃河河系と楊子江河系と、百多の風土、歷史に太差ある此の如し、故に兩々の間動もすれば輒ち相容れず、北人南人と相抵排し、破綻又破綻せしもの偶爾にあらず、既に然り、支那二十二代歷史の多分は北人將た北狄と南人との間なる確執史なり、夫の「書足以記姓名而已、劍一人敵不足學、學萬人敵」と乃ち吳中の兵八千人を擧げて秦を攻めたる項羽の英爽、「倉卒蕪蔞亭豆粥、滹沱河麥飯」を嘗め、荊天棘地の間を衝きて漢の遺業を恢復せし光武の俊邁より、張睢陽の齒、顏常山の舌、胡澹庵の文、岳飛の武、文天祥の節、方孝孺の義、鄭成功の俠に至るまで、畢竟是れ皆北人將た北狄と南人との確執中に發せる意氣に過ぎず、然れども黃河河系の沖積平原は直ちに楊子江河系の沖積平原に連り、他の山脈縱橫して列國獨立に適宜せるが如くならず、要するに山は界國分治を促すも、河は逐に境域障籬を作す能はず、夫の陳の孔範が「長江天塹、豈能飛渡」とて只管楊子江に恃賴し隋兵の來るを冷笑せしも、言未だ畢らざるに、隋の將軍賀若弼は廣漢より江を渡り、韓檎虎は橫江より夜渡り、進みて陳の都建康(南京)に入り、陳主自から妃嬪と井中に投じて國茲に亡び、隋遂に南北朝の列國を混同して支那を一統せしが如き即ち是れ、隋天下を獲るや、通濟、永濟の兩渠を開き、南は楊子江南より北は黃河北に到り、即ち江河を縱絕して南より北に流駛する人爲の一大河系を鑿ちたるが爲め、江河兩系は自から連絡し來り、茲に愈〻一統的の趨向を致しぬ、特に隋の南北兩派の學を併せ採りたるが如きは最も江河兩系開化の一統を促したる所、蓋し東漢の鄭玄は孟子以後の大儒と仰望されたる者、後魏の王肅起りて之と拮頡するや、學風南北兩派を區劃し、南北朝の頃に至るや、北方には深厚縝密なる鄭玄等の學盛行し、南方には簡易綺靡なる王肅等の風自から好尙に投じ、爲めに南北間の思想界に巨

支那の一統的傾向、河は境界を作す能はず

隋の一統

唐の一統

溝を劃し、黄河河系と揚子江河系と人々の習氣趣味を頗りに分隔せしも、其の勉めて南北派を併せ採りたるは南北を連絡する大運河の開鑿と共に、最も一統の氣運を呵成せしものの、唐興るや、隋の遺業を繼承し、兼ねて新鋭創業の風雲に際會し、愈益一統の氣運を勃發し、太宗英邁の資は早くも思想界の一統は即ち天下を一統する第一策たるを看破し、首として南北學風の折衷を計り、孔穎達、顔師古等に命じ五經正義を撰ばしめ、易は王弼の注、書は孔安國の傳、詩は毛萇の傳、禮は鄭玄の注、左傳は杜預の注を取り、併せて諸家の疏釋を加へ、天下をして據る所を知らしめたるより、思想界の根抵茲に鞏立す、後幾何ならず、陳子昂、楊炯、盧照隣、駱賓王が徒らに南文(六朝以來の駢儷四六文)を綴るを屑しとせず、慨然獨り自舊して北人の思想(周漢時代の古文、即ち黄河河系の思想)を此間に注入せんと鋭意し、李白、楊子江河系の上游に生れ、黄河河系に來りて發達し、其の詩たる、才分高く、趨向正く、能く建安以後の綺麗を斥攘し八代の衰を起すを以て自から任じ、韓愈(字退之)江河兩系の中間地に人と爲り、淮南人を以て黄河河系の長安に上り、雄厚博大の才を揮ひて古文を復興し、柳宗元(字子厚)黄河河畔より起りて之れと志を同くし、刺意厲行、以て思想界の中正を計りき、是より先き音樂の如き、太宗の時、祖孝孫出でゝ、南北の兩樂を折衷し、且つ古樂を酌取して大唐の雅樂を制定し、書風も亦た虞世南、歐陽詢、顔眞卿、柳公權、李北海の徒起りて能く南北兩派を包容し、別機軸を出して各一家を作し、是に至りて有形上に、無形上に、黄河河系と揚子江河系との渾融一統は斐然として大成す、蓋し支那四千年の歴史中、江河兩系の微妙に調和神契して一團となり一國家となり一社會となりたるもの、唐を以て第一に推す、唐亡びて五十二年、五代列國の亂あり、梁、唐、晉、漢、周、北漢は黄河系に起り、呉、前蜀、楚、荆南、後蜀、南唐、湖南は揚子江河系に國を建て、群雄所在に割據し、虎呑狼噬、江河兩系の大破綻を來す、宋興りて五代列國を一統し、暫らく江河兩系を渾融せしも、長へに之れを保全するの大力なく、北狄たる契丹、金、元の爲めに交も〳〵窘蹙せられ、國亡びて、元之れに代はり、楊子江河系の民人は屏息

黄河揚子江南系一統の大成

五代

宋

元

明　黃河河系と露西亞的

清　楊子江河系と英吉利的

して生氣なく、詩人の金陵(南京)を過ぐる者、「玉樹後庭花不見、北人租地種茴香」の感懷あり。既にして明楊子江上より起り、北狄たる元を倒し、稍、江河兩系を一統せしも、僅に兩系の破綻を彌縫するに過ぎずして眞成に渾融し得ず、文物特に見るに足るものなく、後遂に北狄たる清に亡さる。清國を建つる今に二百四十年、而して遂に江河兩系の混同を大成せず、將來或は黃河系の露西亞的となり、楊子江河系の英吉利的と化成するや未だ知るべからずとなす。「支那史」を立論し了り、是に至り慨然筆を擱き、西望して太陸將來の風雲を窺ふこと良久し、乃ち海を隔てゝ燕趙の士に檄す、復た昔時の屠狗の者あらば、能く悲歌を發して家國の前途に感慨する所あれと

雁落平沙一雨收、淡烟日斜荻花洲。
憑誰與作王摩詰、寫寫江南水墨秋。

歌日波江、　宋黃　極

黃河、楊子江の文學の殊異

黃河　雄渾悲壯

雄渾の中、情致あり

黙想の情あるも亦た豪宕

今と偲み古と

(九) 支那の三大河の文學

支那の黃河、楊子江の開化や、個々各、太殊差ありとせば、個々の文學亦た各、太殊差なかるべからず、而して果然之れを視る、請ふ先づ兩大河江に交渉せる詩賦、歌謠を諷誦せんか。

(一) 黃河

白草原頭望京師、黃河水流無盡時、秋天曠野行人絕、馬首東來知是誰。　唐　王昌齡
塞行

黃河遠上白雲間、一片孤城萬仞山、羌笛何須怨楊柳、春光不度玉門關。　王之渙
州詞

一上高城萬里愁、蒹葭楊柳似汀洲、溪雲初起日沉閣、山雨欲來風滿樓、鳥下綠蕪秦苑夕、蟬鳴黃葉漢宮秋、行人莫問當年事、故國東來渭水流。　許渾
城東樓

經過此地無窮事、一望淒然感廢興、渭水故都秦二世、咸陽秋草漢諸陵、天

空絶塞聞邊鴈。葉盡孤村見夜燈。風景蒼蒼多少恨。寒山半出白雲層。咸陽

懷古　劉　滄

樓外風煙接紫垣。樓頭客子動歸魂。飄蕭蓬鬢驚秋色。狼藉麻衣涴酒痕。天塹波光搖落日。太行山色照中原。誰知滄海横流意。獨倚牛車哭孝孫。汴梁

雜詩　金李　汾

孤亭突兀插飛流。氣壓元龍百尺樓。萬里風濤接瀛海。千年豪傑壯山邱。球星澹月魚龍夜。老木清霜鴻雁秋。倚劍長歌一杯酒。浮雲西北是神州。横波亭

元　好　問

薊門城上月婆娑。玉笛誰爲出塞歌。君自客中聽不得。秋風吹落小黄河。寄元美

明　李　攀　龍

野曠天低日欲西。北風吹雪雁行低。黄河渡口行人少。一片寒沙沒馬蹄。渡黄河

屠　隆

暮雲黯澹壓邊樓。雪滿黄河凍不流。野燒連山胡馬絶。何人月下唱凉州。上曲

謝　榛

懷ふ、而かも規模雄大

悲涼蒼莽、沈鬱豪健、北方之強の氣象あり

突兀横絶、遠山自ら「北人不拾江西唾」と謂ふ、眞然

情緒淵遠

氣局開闊

飄然遠望

武關は分水嶺の絶頂に在り

と、而かも一たび分水嶺を超え、

遠別秦城萬里遊。亂山高下入商州。關門不鎖寒溪水。一夜潺湲送客愁。寄武關

唐　李　渉

楊子江

眞に昔れ南方の古樂府

當時の晉人宛如たる末代の羅馬人

情思回折

黄河に在りては發し得ざる處

の如く、

(二)　楊子江

に入るや、即ち

江南可採蓮。蓮葉何田田。魚戲蓮葉間。魚戲蓮葉東。魚遊蓮葉西。魚戲蓮葉南。魚戲蓮葉北。江南　漢樂府

桃葉復桃葉。渡江不用楫。但渡無所苦。我自來迎接。桃葉歌

晉　王　獻　之

汀洲採白蘋。日落江南春。洞庭有歸客。瀟湘逢故人。故人何不返。春花復應晩。不道新知樂。只言行路遠。江南曲

梁　柳　惲

茨菰葉爛別西灣。蓮子花開猶未還。妾夢不離江上水。人傳郎在鳳凰山。江南行

唐　張　潮

爽俊

萬里辭家事鼓鼙。金陵驛路楚雲西。江春不肯留行客。草色青青送馬蹄。送李判官之潤州行營　劉長卿

太白飄逸、而かも尙ほ遺般の句あり

舊苑荒臺楊柳新。菱歌清唱不勝春。只今惟有西江月。曾照吳王宮裏人。登蘇臺覽古　李白

自から楊子江上の觀情

月落烏啼霜滿天。江楓漁火對愁眠。姑蘇城外寒山寺。夜半鐘聲到客船。楓橋夜泊　張繼

撫慨

九月湘江水漫流。沙邊唯覽月華秋。金風浦上吹黃葉。一夜紛紛滿客舟。宿湘江　戎昱

憂鬱而かも溫雅

傷心欲問前朝事。唯見江流去不回。日暮東風春草綠。鷓鴣飛上越王臺。雨過感興　竇鞏

伏仰感慨

吳王舊國水煙空。香逕無人闌葉紅。春色似憐歌舞地。年年先發館娃宮。吳城覽古　陳羽

感情は沅湘の水より深し

盧橘花開楓葉衰。出門何處望京師。沅湘日夜東流去。不爲愁人住少時。湘南即事　戴叔倫

最も苦れ銷魂の處

人事變遷、江山俯仰、感慨無限

多感なる樂天如き人、天涯地角の邊に流謫せられ、會〻客を送るの際萬里長安の娼女が琵琶を彈くと聞く、女亦薄命淪落の人、人、趣、味、情、境、交もく微妙に調合し來り、以て此の千古の大曲を產む、而かも脚色として全篇に映發せしむるは舞臺の實に最

偶向江邊採白蘋。還隨女伴賽江神。衆中不敢分明語。暗擲金錢卜遠人。江南曲　于鵠

山園故國周遭在。潮拍空城寂寞回。淮水東邊舊時月。夜深還過女牆來。石頭城　劉禹錫

潯陽江頭夜送客。楓葉荻花秋瑟瑟。主人下馬客在船。舉酒欲飲無管絃。醉不成歡慘將別。別時茫茫江浸月。忽聞水上琵琶聲。主人忘歸客不發。尋聲暗問彈者誰。琵琶聲停欲語遲。移舟相近邀相見。添酒回燈重開宴。千呼萬喚始出來。猶抱琵琶半遮面。轉軸撥絃三兩聲。未成曲調先有情。絃絃掩抑聲聲思。似訴平生不得志。低眉信手續續彈。說盡心中無限事。輕攏慢撚抹復挑。初爲霓裳後六么。大絃嘈嘈如急雨。小絃切切如私語。嘈嘈切切錯雜彈。大珠小珠落玉盤。間關鶯語花底滑。幽咽泉流水下灘。水泉冷澁絃凝絕。凝絕不通聲暫歇。別有幽愁闇恨生。此時無聲復有聲。銀瓶乍破水漿迸。鐵騎突出刀鎗鳴。曲終收撥當心畫。四絃一聲如裂帛。東船西舫悄無言。唯見江心秋月白。沈吟放撥插絃中。整頓衣裳起斂容。自言本是京城女。家在蝦

多趣なる楊子江頭に在るを以てのみ

清人陳、全篇を佛蘭西語に飜譯す、佛京の交際社會喝喇として傳誦す、自から佛人の好に適ふもの、正に是れ楊子江文學

楊子江文學の模範

蓋陵下住。十三學得琵琶成。名屬敎坊第一部。曲罷長敎善才服。粧成每被秋娘妒。五陵年少爭纏頭。一曲紅綃不知數。鈿頭銀篦擊節碎。血色羅裙翻酒污。今年歡笑復明年。秋月春風等閑度。弟走從軍阿姨死。暮去朝來顏色故。門前冷落鞍馬稀。老大嫁作商人婦。商人重利輕別離。前月浮梁買茶去。去來江口守空船。遶船明月江水寒。夜深忽夢少年事。夢啼妝淚紅闌干。我聞琵琶已嘆息。又聞此語重唧唧。同是天涯淪落人。相逢何必曾相識。我從去年辭帝京。謫居臥病潯陽城。潯陽地僻無音樂。終歲不聞絲竹聲。住近湓江地低濕。黃蘆苦竹遶宅生。其間旦暮聞何物。杜鵑啼血猿哀鳴。春江花朝秋月夜。往往取酒還獨傾。豈無山歌與村笛。嘔啞嘲哳難爲聽。今夜聞君琵琶語。如聽仙樂耳暫明。莫辭更坐彈一曲。爲君翻作琵琶行。感我此言良久立。卻坐促絃絃轉急。淒淒不似向前聲。滿坐重聞皆掩泣。座中泣下誰最多。

江州司馬青衫濕。琵琶行　白居易

煙籠寒水月籠沙。夜泊秦淮近酒家。商女不知亡國恨。隔江猶唱後庭花。金谷園　杜牧

吳中の情、吳中の景

虛靈人と隔絕す

黃河河上故人に別るゝ處と異なり

山谷の此詩、一部楊子江沖積層平原の地理書

黃葉、水流、風急、人語、雞聲合せ來る、叫囂なるに似て而かも清秘眞畫景

情韻愛び到る

遶渚愁紅蕩碧波。吳娃齊唱採蓮歌。橫塘一別千餘里。蘆葦蕭蕭風雨多。夜泊永樂有懷　許渾

江雨霏霏江草齊。六朝如夢鳥空啼。無情最是臺城柳。依舊煙籠十里堤。過金陵　韋莊

楊子江頭楊柳春。楊花愁殺渡江人。數聲風笛離亭晚。君向瀟湘我向秦。淮上與友人別　鄭谷

十月江南未得霜。高林殘水下寒塘。飯香獵戶分熊白。酒熟漁家擘蟹黃。橘摘金包隨驛使。米舂玉粒送宮倉。踏歌夜結田神社。遊女多隨陌上郎。鹵詠江南風土　宋　黃庭堅

黃葉西陂水漫流。蕭蕭風急滯扁舟。夕陽暝色來千里。人語雞聲共一邱。泊吳門　寇國寶

數間茅屋水邊村。楊柳依依綠映門。渡口喚船人獨立。一蓑煙雨濕黃昏。吳門道中　孫覿

南歸北去路茫茫。不是行人也斷腸。可惜湘江春夜月。落花時節照離觴。過支那の三大河の文學　楊子江

風塵外の趣

骨節姍姍

陸門又た渡淮花楊一即刻に帆を揚げて遡る。點點衝點雙櫓水に飛子。上船頭。船人間不得飛。淮。

青邱、楊子津頭に在り、放道に般渡の字あり、黒河紅せんか、冰落青燈流下「淚倒卷河の長入絃瀉一」

湘驛送王、柳州南歸　范成大

來時秋雨滿江樓。歸日春風度客舟。回首荆南天一角。月明吹笛下楊州。

南別双劍書東歸　鄭震

畫欄目斷楚雲西。芳草連天客思迷。家在江南煙雨裏。落花時節杜鵑啼。

春雜興　葛起耕

三山雲海幾千里。十幅蒲帆掛秋水。吳中過客莫思家。江南畫船如屋裏。蘆芽短短穿碧沙。船頭鯉魚吹浪花。吳姬蕩槳入城去。細雨小寒生綠紗。我歌水調無人續。江上月涼吹紫竹。春風一曲鷓鴣詞。花落鶯啼滿城綠。過嘉興　元薩都剌

姑蘇城外短長橋。煙雨空濛又晚潮。載酒曾經此行樂。醉乘江月臥吹簫。

雨中過石湖　倪瓚

楊子津頭風色起。郎帆一開三百里。江橋水柵多酒壚。女兒解歌山鳩鳥。武昌西上巴陵道。聞郎處處經過好。櫻桃熟時郎不歸。客中誰爲縫春衣。陌頭空問琵琶卜。欲歸不歸在郎足。郎心重利輕風波。在家日少行路多。妾今能

勿あり

多致

憑機致あり、眞個の彩筆、逼て來りて人を惱殺す

風神天然

清腴

情致纏綿

清麗

使烏頭白。不能使郎休作客。憶遠曲　明高啓

館娃宮外繫蘭橈。何處鐘聲月上潮。露落臺空春樹暗。隔江漁火照楓橋。夜宿姑蘇　煒

湖州溪水穿城郭。傍水人家起樓閣。春風垂柳綠軒窓。細雨飛花濕簾幙。四月五月南風來。當門處處芰荷開。吳姬畫舫小於舟。蕩槳出城沿月回。孤浦浪深迷白紵。有時隔花聞笑語。鯉魚風起燕飛斜。菱歌聲入鴛鴦渚。湖州樂　孫蕡

日暮東塘正落潮。孤篷泊處雨蕭蕭。疎鐘夜火寒山寺。記過吳楓第幾橋。夜雨泊寒山寺寄西樵禮吉　清王士禎

水驛迢遙望不分。愁心落葉共紛紛。扁舟一夜搖江月。入夢吳歌斷續聞。吳江舟夜　汪洋度

六代江山久寂寥。勝朝宮闕亦湮銷。秪餘燕子憐春色。依舊銜泥過內橋。秦淮雜詠　沈德潛

垂揚垂柳滿長堤。薄霧輕煙晚更迷。三十六灣春草綠。鷓鴣聲裏夕陽低。湘

中雜興　王元勳

臺城秋草暮雲殘。六代興亡雁影寒。無限傷心金粉地。憑君畫出與人看。送王石谷遊金陵　陳珊

船頭風靜白鷗雙。萍葉隨潮也渡江。沽酒自尋京口驛。六朝山影在蓬窓。晚泊鎭江京口驛　張問陶

桃葉桃根付玉簫。秦淮秋影上寒潮。分明丁字簾前水。一片斜陽送六朝。自題雲藍案句小影　陣文述

施家灘上泊舟時。落蕊楊花聽子規。山靜江深天在水。一痕新月小於眉。泊施家灘　日本竹添光鴻

何等の清澄

一幅水墨の畫

幽閑人を動かす

清淨愛すべし

岷江

揚子江に交渉せる詩賦、歌謠は此の如し。江の上游なる大支流に

(三) 岷江

あり。岷江や滔々北より來り、北東には劒門の塞あり、東には巴山の群嶺逶迤として曳き、南には峩眉の群峯突兀として立ち、西には大雪山系奔馬の如くし、山水襟束の間、一大野の蒼莽として開き、風土に、氣候に、歷史に、社會に、獨立の別天地を作すものを蜀(四川)となす。既に獨立の別天地を作す、其の文學も亦た別天地を作し、自から青山、綠水、白雲、黃樹に風化せられ、神仙の氣ありて、人間の染癖少く、而して「蜀以著作表漢唐宋、風氣之盛、天下翕然宗之、雖千百年迄於今不衰」と云ふ。夫の漢には子虛上林賦を著はし武帝をして「飄飄有凌雲意」と品評せしめたる司馬相如の如き、甘泉河東、校獵、長楊の四賦を奏し太玄經を著したる楊雄の如きを孕み出し、唐には「謫仙人」てふ李白を孕み出し、當時杜甫、白居易、樂天、羅隱、鄭谷の諸人長へに此間に流寓し、宋には「晴空鳥跡、水面風痕、自有天地以來一人而已」てふ蘇轍、東坡及び蘇氏一家の如き「莊之後千有餘歲の一人たる張愈の如きを孕み出し、仙風道骨の黃庭堅、山谷、亦た久しく俺留し、明には青蓮山に隱れ「人不見其面十三年」てふ宋濂を孕み出し、淸には禪門の大有德たる破山禪師を孕み出したるが如き即ち是れ。試みに此間の風土を咏ずる一二を吟ぜんか、

錦水近西煙水綠。新雨山頭荔枝熟。萬里橋邊多酒家。遊人愛向誰家宿。成都曲　唐張藉

蜀

岷江文學の特色

岷江の文人

二詩忘れ蜀中の地理畫

支那の三大河の文學　岷江

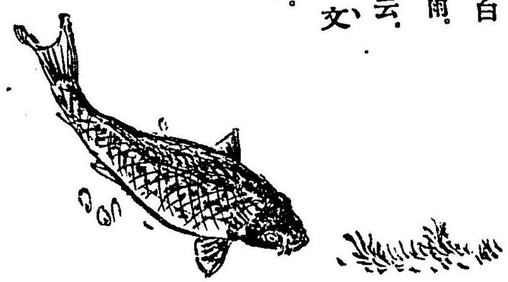
馬頭春向鹿頭開。遠樹平蕪一望間。雪下文君沽酒市。雲藏李白讀書山。江樓客恨黃梅後。村落人過紫芋間。堤月橋煙好風景。漢庭無事不征蠻。蜀中　鄭谷

作

蜀の四圍や、山嶺重壘、中に大江汪洋として屈折す、是を以て江上より蒸騰せる多量の水氣は、四圍の山嶺に撞擊し、縹渺として白雲となり、凝結して陰雨となり、「七月五日六日七日皆雨。自入蜀雨常居十之九。詢之。曰。每歲夏天陰雨連綿。范記云。蜀中無梅雨。未必然也」棧雲峽雨日記)と、實にや蜀中の文學は、宛として雲の如く雨に似たる氣象あることを。

萬壑樹參天。千山響杜鵑。山中一半雨。樹杪萬重泉。漢女輸橦布。巴人訟芋田。文翁繼教授。不敢倚先賢。梓州李使君　唐　王維

灩澦如樸翟。塘深魚復陣。圖江水深。大昌鹽船出巫峽。十日泝流無信音。夔州竹枝　宋　范成大



(十)　西洋史

白哲人種の國を建て初めて儼然たる史紀を後昆に垂るゝものを埃及(エギプト)となす。埃及はナイル河の下游に在り、河は亞弗利加太陸の中心より來り、歲歲月時を定めて汎濫し、所在に膏腴なる沙泥を沖積す、是を以て土味肥沃を極め、復た養養を要せず、棗樹自然に亂生して其の果實は民人の常食料に供へ、加ふるに「ドゥーラ」てふ玉蜀黍の一種は、寡單なる器械と勞力とを以て播種の一に對する二百四十の收穫を博し、生計の經費爲めに低廉に、昔時一小兒を壯年まで成育するに二十ドラマ即ち日本銀貨六圓を要するに過ぎざりしとなん(千九百年前埃及を旅行せし希臘史家デオドルス・シクールスに據る)。太古民人の此所に孳殖して一社會を構造せしものの偶爾にあらず、既に然り、食料は法外に低廉なり、故に民人は法外に孳殖し、隨て勞力低廉に且つ餘剩あり、是を以て太古の建築物たる、夫の巍然天を衝くの三角塔(ピラミッド)に、半身の九地に埋却せる女神像(スフインクス)に、突乎たる石柱(オベリスク)に、巨濶なる石殿に、魁偉なる刻像に皆瑰麗詳雅

棗樹(デート・パーム)

ドゥーラは一株に四五個の穗を生ず、一穗に穀三千と結ぶことあり

勞力の過剩と大建築物

バビロニヤ

チグリス河とユーフラーツ河

所謂「天に達せんとするバベルの高塔」はバビロニヤ人の建つる所

ならずと雖も、齊しく雄大跌宕若くは壯宏崇高にして、今日此間を低徊する者をして轉た肅敬と畏驚の念を勃發せしむ、這般の建築物に使用する一石にして重量四十三貫餘に至るものあり、運搬するに二千の人夫を三年間使役せしことあり、以て民人の過剩と勢力の低廉なりしを徵するに足る、而して是れ皆ナイルの一水に總因し來りナイルなくんば埃及なく、又た世界最古の大史紀なし、眞個に「埃及はナイル河の恩賞なり」。

太古の邦國中、埃及に亞ぐをバビロニヤとなす。バビロニヤは波斯灣に注入する雙兒河チグリス、ユーフラーツの沖積せし地層上に國を建つ。チグリス、ユーフラーツの兩河系は四千餘年後の今日に至るまで世界の寶庫と稱へられ、土味の肥沃なる古今に冠絶し、渾圓球上、麥の土生なる個所は獨り這般の河系上のみ、加ふるに棗樹は太古より宇内第一等の名あり、其他葡萄に諸菓物類に饒々として生產し、河水亦た百多の魚類に富む、バビロニヤの太古富雄を以て鳴り、星學に、建築物に、貿易航運に、金、鐵、寶玉の使用に、大發達を作したるもの自から其故あり、既にしてアッシュリヤなるも

アッシュリヤ

アッシュリヤたる、文學は埃及に及ばず、文學理學は埃及に及ばずバビロニヤに及ばざるも、築及び其他の建開化に至りては、太古の世界に獨歩するのみならず、今世の者も及ばざる所あり

のチグリス河の中游に興り、河畔のニネヴェに宏濶無邊なる都城を起し、遂にバビロニヤを亡ぼし、基督紀元前一千二百五十年より仝六百二十五年に至る六百年の間、唯一絕大の帝國として覇圖太古の世界を蓋ひ、其の民人は當時早く玻璃及び透鏡を發明し、弧の原則を悟了し、隧道、水道、排水道の開鑿術を知悉し、金屬の鑛鈇、鍍キ、光滑の方法に巧練に、槓桿滑車、轉機の仕用に習熟し、特に建築法に至りては未だ希臘式の太妙に達せずと雖も、一種絕特なるアッシュリヤ式を造詣し、壯大、威儼、放膽、豪宕の四力を兼ね、獅子狩りなど如き雄快奇健なる圖畫を浮彫にして建築物に刻しき、紀元前六百二十五年、バビロニヤ亡國の人民、アッシュリヤを滅して獨立し、復た國をチグリス、ユーフラーツの兩河系に建つ、是れを後バビロニヤとなす。國都バビロンは今日其の遺趾を測定するも宛如我が東京市の廣袤に十倍し、王チプカドチザル盛んに土木を興し、飛閣輪奐其勝を極め、所謂「懸空の庭園」の如き世界七奇の一たり、後バビロニヤは星學、數理學の啓發を以て名あり、後世希臘人の如きすら理學に至りては此國より知得せりと自白

懸空の庭園

後バビロニヤの人文

波斯　黑水

ハルース河

信度河

樂殺水

波斯の人文

するに至る、貿易亦た大に進暢し、「通商國」「商人府」として遠近に鳴り、其の特有製造品たる花氈、綿紗を輸出し、以て大食(Tazi 又 Tajik、亞拉比亞)の乳香、フェニキヤの錫、銅、身毒(シンドウ)印度)の眞珠、寶玉、遠東諸國の絹、羊毛、金、象牙等と交換しぬ、建國八十七年、遂に波斯(ペルシヤ)人の爲めに亡さる。

波斯(ペルシヤ)は チグリス河源、ザグロス山系の東麓に開展せる黑水(カラス)河系の平野より起り、王クールス(英語サイラス)武幹あり、紀元前五百五十八年即位の初め、メヂヤ(米)の古王國を亡ぼし、雄名大古に薫灼す、波斯の西にレデヤ國あり、ハルース河(今のキヂル・イルマク河)を以て境とす、而かも河は到底境域を作す能はざるもの、クールス擊ちてレデヤを破り、擧げて其の國土を幷有す、乃ち西顧の患なきを以て、頭りに東の方安息(Ashk 又 Parthia.)、大夏(Dsha 又 Bactriana.)、康居(Sogdiana.)を平げ、領土遂に信度河(インドゥス河)に達し北は大宛(今の露領中央亞細亞 Ferghana 即ち費爾干)を略取し、進みて樂殺水(希臘語の Jaxartes、今の Sir Daria.)に到り、太古の世界に隨一の大帝國を恢弘す、蓋し波斯人はアッシュリヤ、バビロニヤの人文を繼承し、且つ自己の國粹を以て之を陶冶鑄鎔し、間一頭地を出し、宮殿石室の構造彫刻の如きは、埃及式、アッシュリヤ式の未入室より希臘式の太妙に到る渡過の心影は歴々として徵し得、想ふにアッシュリヤの人文は波斯之れを繼承し、波斯の覇威膨脹と共に安息、大夏、大宛の諸國之れを輸入し、安息、大夏、大宛の間より之れを支那南北朝の魏、齊、周に傳へ、遂に隋、唐に波及せしもの、山東省紫雲山武梁祠なる石刻の古物中に歴然たるアッシュリヤ式のもの現存し、ネストリヤ派の基督傳道師の唐に入り布教せし際に建立せし基督教の石碑も亦た此の祠中に儼立するが如き(明治廿六年中美術探究の爲め支那と旅行せし斯學專攻家文學士岡倉覺三氏に據る)、遼東半島海城南門の壁上に唐代の遺物としてアッシュリヤの獅子狩りを浮彫りにせしものを見るが如き(明治二十八年中人類學探究の爲め遼東半島と旅行せし斯學專攻家鳥居龍藏氏に據る)、隋代の古製造として日本大和法隆寺の「四天王紋錦旗」にアッシュリヤの獅子狩りを織り畫き、孝謙天皇の御褥にアッシュリヤの梂の花の變形を織り畫きたるが如き(人類學專攻家三宅米吉氏及び千住學士大竹多氣氏に據る)、炳然としてアッシュリヤ式の支那に傳播せしを悟了し得、蓋し波斯の「拜火教」は「祆教」と稱へ

アッシュリヤの人文支那に入る

波斯の宗教支那に入る

南北朝の世、業既に魏、齊、周の間に盛行し、唐に入り太宗の貞觀五年(西暦六百三十一年、佛教の百濟より日本に傳來せし八十年後)、長安に祇寺を立てゝ波斯寺と名けたることあり、摩尼教も亦た拜火教の一種にして、祇教に先ちて早く支那に入り、遂に唐憲宗の元和二年(西暦八百七年、白樂天全盛の時代)回鶻人(Uigur、今の中央亞細亞に邑居せる Kirghiz 民族の祖先)の請を許し、河南府、大原府に摩尼寺を建てたることあり、基督教亦た上代より支那に入り、唐太宗の貞觀十年(西暦六百三十六年)ネストリヤ派(アッシュリヤ派)の傳道師阿羅本(アロホン)等長安に來り、太宗特に房玄齡をして之れを迎へしめ、大秦寺(支那にては羅馬を「大秦」と呼ぶ)を立てゝ其經を飜譯せしむ、所謂「景教」是れなり、尋で唐一代の間は此教大に盛行し、郭子儀の如き地を捨てゝ景寺を立つるに至れり、アッシュリヤ、波斯の思想文物は支那に入り、支那の思想文物も亦た西域の諸邦に傳はり、西洋史と東洋史との連絡は緊然として裂くべからず、チグリス、ユーフラーツ二水と黃河、揚子江二水とは無形上に混同合流する此の如きものあり、而かも歐米の史家と自ら號ふ

アッシュリヤ派の基督教支那に入る

東西歷史の連絡

大史筆の材料

者、之れを悟らず之れを省みず、徒らに西洋史と東洋史との間に劃然たる畛域を築き、以て兩々を別々にし來る、何等迂疎の見ずや、誰か千秋の大史筆を揮ひて東西の二水を混同合流するの新識見を發表する者ぞ、日本の史家が名を世界に成すは此所に在り、予輩志餘ありて力足らず、一念此所に到る毎に感慨無量。

河湖地名考

參考

漢書、隋書、唐書、大唐西域記、北史、元史、西域見聞錄、清人の著述及び釋典等に散見する河湖の現名

アム・ダリヤ河

◎嬀水(漢書)　烏滸水(隋書)　縛芻(大唐西域記)……Amu Daria (波斯語、daria は「河」の義)、Oxus (希臘語)、Vak-shu (印度語)、Ak-su (キルギツ語「白水」の義、蓋し "Oxus"、"Vak-shu" "縛芻" は皆 Ak-su の轉訛)、Jihun (亞拉比亞語)。

シル・ダリヤ河

◎藥殺水(北史)　賽芬(元史)……Sir Daria (波斯語「蛇首の水」の義)、Jaxartes (希臘語、「藥殺」は蓋し "Jaxartes" の轉訛)、Silun (亞拉比亞語「賽芬」は蓋し "Silun" の轉訛)。

セラファッシャン河

◎那密水(唐書)……Zeravshan (「金の分配者」の義、沙金あると灌漑の利あるに因る)。

オクス河

◎怛邏斯(清人)……Talas。

ロプ湖

◎鹽澤(漢書)　羅布湖(清人)……Lob Nor (羅布湖即ち蒲昌海)

カンヂス河　◎恒河　恒伽　強伽　殑伽　殑伽　福水……Ganges（普通語）、Ganga（印度語「恒河」「恒伽」「強伽」「殑伽」「殑伽」は蓋し"Ganga"の轉訛）。

インデュス河　◎信度　信河　辛頭　新頭　彌闍（唐書、大唐西域記）　驃河……Indus又Sind（普通語「信度」「信河」「辛頭」「新頭」は蓋し"Sind"の轉訛）、Sindhou（西藏語）、Sidda又Chilla（蒙古語）。

ユーフラート河　◎弗利剌河（唐書）……Euphrates（普通語）、Shatt el Suwari（亞拉比亞語）。

ヴォルガ河　◎阿得水……Volga（普通語）、Atel（「阿得」は蓋し"Atel"の轉訛）。

バイカル湖　◎北海（漢書、唐書、唐書）……Lake Baikal。

バルカッシュ湖　◎西海（漢書）……Lake Balkash 或は Aral Sea（蓋し Lake Balkash 最も近し）。

アラル湖　◎花剌子模（元史）……Aral Sea。

アラ・クル湖　◎阿勒克拉（清人）……Lake Ala Kul（キルギヅ語「雜色なる湖」の意）。

イシック・クル湖　◎熱海　特穆爾圖泊……Lake Issik Kul（キルギヅ語「暖湖」の義、故に漢人「熱海」と稱ふ）、Temurt Nor（蒙古語「特穆爾圖泊」即ち是れ）。

カラ・タル湖　◎大龍池（大唐西域記）　阿耨達（釋典）　哈剌庫爾（清人）……Kara Kul（キルギヅ語「哈剌庫爾」即ち是れ）。

西海は地中海なり

漢書の「都護班超。道甘英。使大秦（Rome.）。抵條支（Tajik）。臨大海。欲度安息（Parthia）西海。船人謂英曰。海水廣大。往來者。逢善風。三月乃得度。若遇遲風。亦有二歲者」とある「西海」は Lake Balkash 又は Aral Sea にあらずして蓋し今の地中海。

希臘

希臘列國の根據地は河畔に在り

羅馬

羅馬史の行路は多瑙、ライン二河の行路なり

「呼得」の字唐書に見ゆ。

白晳人種の歐羅巴の土に入り初めて國家を興す者を希臘（ヘルラス）羅馬（ローマ）の二となす。史家二者の歴史を以て半島國の歴史、山嶽國の歴史となす、焉んぞ知らん、其の根據地や眞個に河邊に在ることを。希臘列國の盟主たるアッチカの首都アテナエ（所謂雅典）はケフィスス河上に建ち、ラコニカの首都スパルタはエウラタス河畔に立基し、其他アエトリヤ國はアケロース河、ピュードラ、トリコニス二湖に、フォーキス、ボエオチヤ二國はケフィスス河に、エリス、アルカデヤ二國はアルフェウス河に特賴して獨立せしもの。要するに希臘の地勢たる、亂山高下して河湖其間を襟帶し、而して這般河湖の邊畔に開展せる溪谷個々にこそ列國個々の獨立せしものなれ。

羅馬亦た伊太利半島中心の大河たるチベリスの邊畔を根據地となし、覇威勃々、遂にライン河に沿ひて北下し、以て歐羅巴の中原に割據せしゝルヴェチ、ゴール日耳曼の各民族を戡定し、多瑙河に順ひて東下し、以て東部歐羅巴に蟠踞せし呼得（ゴット）（Gothe）、スラヴ等の諸民族を征服し、只管二河に特賴し、二河の行路に沿ひつ順ひつして、茲に雄魁洪濶たる帝國を恢弘せしも

カエザル、ルビコン河と渡る、河は伊太利の北部に流れアドリヤチック海に注ぐ

ゴット民族多惱河と渡る

多惱河と西洋史

亞細亞より各種民族の歐陸に遷徙する大衝路

の、知り得たり、羅馬史も亦た河の歷史なることを、更に河の遂に境界を作す能はざる事や羅馬史最も分明に顯示す、蓋し羅馬はルビコン河を以て本國と外藩との境界となし、是を以て千古不易の法度となせしも、カエザル(所謂シーザー)の叛するや、鞭を揚げて「骰子は投げられたり」と絶叫し、快馬一躍馳せて河を渡り、本國に入りて國都を陷れ、遂に大統領に自立せしが如き、後世多惱河を以て本國と蠻人との境界と劃定したるも、呼得民族は幾度か此の勿來關を渡り、輙ち本國の疆內に闖入し、遂に官軍を破りて皇帝ヴァレンスを斬り、河南の各地に瀰漫せしが如き即ち是れ。

歐羅巴の歷史に河の絶大なる感化を附與せしものを、多惱ライン、の二水となす、多惱は元史の禿納蓋し是れ、其の流勢たる、西の方歐陸の中原より東の方亞細亞太陸に向ひて馳り、東歐の全躰を灌注して黑海に入るもの、而して黑海は裏海(元史の寬定吉思海)に邇近し、直ちに亞細亞太陸と連接するを以て、自から各種民族の亞細亞より歐陸に遷徙する大衝路となり、特に中央亞細亞なる今のアムダリヤ河が現時の如くアラル海に入らず

ケルト、デウトン民族の遷徙

スラヴ、匈奴、馬札兒、突厥の遷徙

十字軍の連路

生存競爭の活舞臺

して裏海に注ぎたる世代に在りては、中央亞細亞に瀰漫せし百多の民族は大抵アムダリヤ河に沿ひて西下し、裏海、黑海を過ぎりて多惱河口に到り、遂に河を西上して歐陸に闖入せしもの、上古ケルト民族に、デウトン民族に、皆亞細亞より來りて多惱河系に散住し、部落相互に排擠し鬪爭し、千年遂に寧日なかりしも、羅馬の覇威膨脹と共に、其の吏民、兵士等此間に雜居し來り、漸く蠻人の俗を移して化に嚮はしめ、麤野剛健なる素質に禮敬文雅の分子を鎔冶し、遂に今の歐陸中原なる幾多强邦の原子を成す。後、スラヴ民族も亦た河に賴りて入り來り、蒙古種たる匈奴(Huns)、馬札兒(Magyars)突厥(Turki)の諸族も河の兩岸に國を興立しき。既にして當初亞細亞より各民族の西上して歐陸に闖入するの大衝路たりし此の河系は、後代に到り亦た歐陸より亞細亞に東下するの大衝路となり、歐陸全躰の絶大運動たる十字軍の如きも、實に多惱河系を東に下りて長驅し、軍了るや亞細亞の文物機器を携へつゝ亦た此の河系に賴りて歐陸に歸陣しき。此く歷史上の大衝路たり、是を以て千秋の間生存競爭の活舞臺となり、戎馬

各國自由航行

馳驅百多の民族朝に興り夕に亡び、宗社邱墟の感多少、而して今日上游に
はヴュルテムベルヒ、バエルンの二王國建ち、中游には墺地利帝國、匈牙利王
國雄據し、下游には塞爾維亞、勃爾俄利亞、羅馬尼の三國分立し、河口より中游の
「鐵門」に到るまでは萬國の自由航行に一任し、航行に關する百般の制規は
墺匈帝國塞爾維、勃爾俄利、羅馬尼の四國より各一人の委員を特派して之
れを料理することとなるも、四國の間、動もすれば議協はず、爲めに外交上の

東方問題の焦點

問題を紛出するのみならず、特に下游は東方問題の焦點となり、歐陸近代
期の外交事件の妖室となる、世の東方問題を叫び外交論を擂摩する者、先
づ雙眸を多惱河に向ひて照らせ。

ライン河

「ライン」と一たび聞かば、海山萬里の日本人をしてすら輙ち其の銀の如き
江水と兩岸の故城殘壘と葡萄の美酒とを懷に浮ばしめ、幾掬の詩思は滾
滾として湧き來らしむ、何ぞ況んや獨逸人をしておや、獨逸人は、歷史上に、
風土上に、物産上に、景色上に、千古萬古其の感化と太慈悲に沐浴する者、宜
べなり嘆頌して「父ライン」と喚ぶことや、豈に獨り獨逸人に關はるのみな

歐陸中原列國均勢の原動力

多惱、ライン二河の大職責

らんや、河は上代ゴール、日耳曼各民族の間を流れ、中古以降、瑞典、佛蘭西、獨
逸、フランデルス(和蘭、比耳義)の際を縱橫し、專ら歐陸中原の興廢消長に干
預し、列國均勢の原動となり、由來歷史上の大勢力たり、蓋し多惱は東に向
ひて流れ、亞細亞洲に對し口を開くを以て、亞細亞より各種民族の歐陸に
入り來る門戶となり、西上するの大衢路となる、而して多惱に賴りて歐陸
の中原に靡至せる各種民族は、此所に來りて會、ライン河系の北と西に向
ひて駛るに順ひ、輙ち北下又たは西下して歐陸の北部、西部、バルチック海岸、
北海岸に思ひ〳〵に遷徙せしもの、要するに多惱の東流しラインの北流
西流するは、歐陸に於ける人種配布上に絕大無二の職責を果したる所、而
して甲は東部歐羅巴全躰の政治上、經濟上の中心となり、乙は地中海より
北海、バルチック海に到る間の活殺權を掌握し、歐陸中原の政治上、經濟上の
覇主たり、他の北獨逸諸河たるヴェーゼル、エルベ、オーデル、ヴスチュラが北の

北獨逸諸河の所爲

方バルチック海上に於けるサクソン民族と、西の方シェルド(比耳義、セイン、
ロアー)佛蘭西の諸河上に於けるサリック・フランク民族とを連絡し、又た北

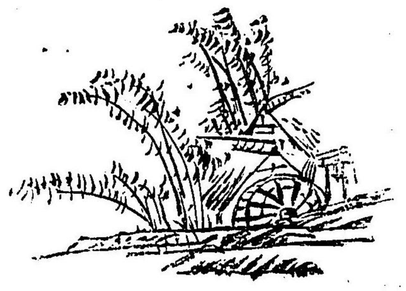
佛蘭西諸河流の勢力、西班牙、葡萄牙の諸河流の勢力

ヘブリウ人は最も理學的觀念に缺くる者、而して此の純なる理學に適合すると詩の作すの理學は遠く四旬の中に盡く

天地間の一大壯觀

の方、丁抹、瑞典、諸威所在なるアングル民族、サクソン民族と、東方に散在せしスラヴ民族とを聯繫し、以て歐羅巴の歴史に幾多の關係を附與せしことあるも、遂に多惱ライン二水の爲す所の半にすら至らず、何ぞ況んや佛蘭西の諸河流は、其の關係する所佛蘭西の範圍のみにしか及ばず、西班牙、葡萄牙の諸河流は、西班牙、葡萄牙の境地の内に交渉する所あるのみ、歐羅巴の歴史を討査せんと欲せば、多惱ラインの歴史を討査せば可、大可。

"And surely the mountain falling cometh to naught
And the rock is removed out of its place,
The waters wear the stones,
The overflowings thereof wash away the dust of the earth."
—Hebrew poem.



"The great rivers which move like God's Eternity."

太西洋に注入する河は口と開きて歐人の移住を迎ふ

ミシッピー河と米國史の眞面目

米國史

（十一）

米國史の行路は單に河の行路のみ。太西洋に注入する河（即ちアレガニー山東の諸流）は西より東に流れ、河口は歐羅巴に向ひて開く、歐人の此土に移住する者、此の河口より直ちに内陸に闖入し、家を建て烟を起し、都邑を創基するは自然の勢なり。此の如くして英人の植民地はジェームス河（今のヴァージニヤ州）、カネッチカット河（今の新英蘭各州の開祖）、ザスケハンナ河（今のペンシルヴェニヤ州）の畔に建ちぬ、和蘭人の植民地はハドソン河畔（今の新約克州）に建ちぬ、瑞典人の植民地はデレウェヤー河畔（今のデレウェヤー州）に建ちぬ、佛蘭西新教徒ウグノー派の植民地はサンテー河畔（今の南カロライナ州）に建ちぬ。既にして這般の各州は蓮望倚頼して本國英吉利の苛政に抵排し、蹀血七年、獨立して北米合衆國の基礎を肇定す。

太西洋岸の各州人口漸く孳殖し、移住の徒乃ちアレガニー山脈を西に超ゆるや、ミシッピー河の大野は蒼莽として眼前に開展す、時に大野の強半は

佛蘭西に屬す、合衆國政府之れを買收するや、無限の寶庫は戸を啓きて待ち、絶大の農業は肥沃なる此の河系に興起し、米國膨脹史の新世紀は此に始れり、米國の版圖斯く膨脹するや、北と南と相距ること遠く、多雪嚴寒の部分より椰樹の亂生せる地方に到り、風土氣候、百般の圏外物の殊異と共に利害の衝突は此間に起生し、聯邦の礎柱を動かすもの少きにあらず、而かも南北を結び南北を連絡し、合衆國の眞面目を保維せしむるものを、ミシッピー河となす、ミシッピー河や北より南の間を流駛し、灌漑縱横、幹流支流の舟行し得るもの無慮一萬二千里、以て南北各州を結び且つ連絡す、後、河系に沿ひて鐵道線を蜘蛛の絲の如くに敷き、以て東西を繫ぎ南北を縫ひ、遂に聯邦を破綻する能はざらしむ、獨り是れのみならず、國の東西の地勢齊しく中央に向ひて低下し、此の低下する所にミシッピー河汪洋として流れ、東西の百川悉く此の河王に朝宗すれば、地勢上亦た以て聯邦をして揆離分裂する能はざらしむるもの、

（所謂「ユニオン」と大成する原動力）

既にして墨西哥（メキシコ）との戰役後、太平洋岸一帶の合衆國に入ると同時に、カリフォルニヤ州に黄金の發見あり、時に太陸を横絶する鐵道なく、太西洋岸若くはロッキー山東の各州との連絡は杜絶せしを以て、カリフォルニヤに到る者は洋路を經て來る、而かも太平洋に注入する河は東より西に流れ、河口は固より洋に面す、是を以て太西洋岸若くは歐洲より移住する者、此の河口より直ちに内陸に闖入し、黄金熱の醒めたる後、此所に葡萄園を開き、麥隴を起し、果樹を栽培し、通邑興り、大都建ち、太平洋岸各州の基礎全く成り、其の勢力の膨脹と共に、此所に停滞せず、餘勢滔々、奔りて太平洋中に入り、布哇に波及し、遂に日本の鎖國を開きたるもの蓋し大西洋岸の河は西より東に流れ、太平洋岸の河は東より西に流れ、其に門戸を開きて宛然歐人の來り移住せんことを歡び迎へ、以て各創業的の功蹟を成就し、而してミシッピー河其間を南北に屈折し、以て守成的の大效能を果たす、想ふに合衆國中、人口百萬以上の都市四、其内三は河口に據り、一は湖上に枕す、五十萬以上の都市二、其内一はミシッピー幹流に瀕し、一は江港たり、二十萬以上の都市十二、其内四はミシッピー河系に瀕し、一はポトマック河に瀕し、四は湖に

（太平洋に注入する河は口と開きて歐人の移住を迎ふ）

（河の創業的功績と守成的效能）

（百萬以上の都市は新約克、シカゴ、フィラデルフィヤ、ブルークリン、五十萬以上はセントルイ、ボーチモアー、二十萬以上はボストン、シンシナチー、）

墨港、バフェロー、クリーヴランド、デトロイト、華盛頓、新オルレアン、ピツツバーグ、ミルウオーキー、ニューヨーク、ボストン、ルイスヴヰル

聖ローレンス河ミシシッピー、ローレンス河ミシシッピー、ローレンス二河の灌域として北米利加の三分の一を形成す

合衆國、加奈太の農業國たる所因

枕し、三は江港たり、十萬以上の都市十七、其内八はミシッピー河系に瀕し、六は他の河系に瀕し、一は湖に枕し、二は江港たり、米人曰ふ「ローチエスターの大邑を興せしは一瀑布の力なり」と、合衆國の富強は、全然河、湖の力、合衆國以外に在りては、聖ローレンス河(太西洋岸)の加奈太過去の開化を裨補し、プレーザー河(太平洋岸)の其の將來の開化に資せんとするや量るべからず、二水の開化や合流混同して加奈太の開化始めて大成するもの、蓋し合衆國に加奈太に、純乎たる太陸國たり、故に氣候乾燥を盡くして農耕に適はざるの地方多大ならざるべからず、而かも乾濕適宜に到る處農耕に可に、儼たる農業國と化成したるは、實に洪渺たる湖水と汪洋たる河流の縱横迂曲し、甚だ氣候を和ぐるものあるを以てのみ、

南亞米利加のアマゾンヲ、プラタ二河の二大河系四疏八通し、要するに南亞米利加に至りては、アマゾンヲ、プラタ二水の上に在らん哉と、南亞米利加の勢力、活氣、精粹は、鍾りて此の二河系に存す、「渾圓球上、羅甸民族(西班牙人、葡萄牙人、伊太利人)の大國は、將來何の邊に興るや」と問ふ者あらば、斷として、豫言す、必らず、アマゾンヲ、プラタ二水の上に在らん哉と、

湖
澤
湖の起生

(十二) 湖及澤

湖は陸地に圍繞されたる水の部分即ち是れ、切言せば河の膨脹せるもの、又たは幅太き河と假定し、而して百多の觀察を下せば正に可。

澤は湖の淺きもの、即ち幅太く底淺き河と假定して可。

湖の起生を大別して八となす、

(一) 雨潦、野水などの此所彼所より漲注し、一個所に溜りて起生せしもの、這般の湖は、大抵底淺くして澤をなす、雨潦、野水などの運搬し來れる沙泥は堆積して這般の澤の爲めに緣邊を構造するや、澤は愈〻深み益〻大となる、加賀、越後の日本海岸に點綴せる潟即ち是れ、

(二) 地震、伏流等に因り、地層の陷沒するや、陷沒所に水の湛え、若くは底より泉の噴き出でゝ起生せしもの、琵琶湖即ち是れ、

(三) 地盤の高低不同あるが爲めに、低所には水自から溜りて、高所は自から緣邊をなして起生せしもの、這般の湖は到る處に多々、

湖の主要なる用

(四) 氷河(グレシヤー)に因り穿鑿されたる窪所に雨潦、野水などの滙溜せしもの。這般の湖は英吉利、歐羅巴、北亞米利加には多々なるも、日本には絶無。

(五) 鎮火山の噴出口に雨潦の滙溜せしもの、若くは噴出口の底より泉水の湧出して起生せしもの、所謂火口湖即ち是れ。摩周湖に、恐山湖に、伊香保沼に、乘鞍山嶺の大池に、其他日本の火山の「御池」と稱ふもの皆然り。

(六) 巖石の崩落、地辷り(スベリ)、若くは溶岩、火山灰の堆積等に因り、河道を遮塞し、以て起生せしもの。磐梯山下の三新湖の如き即ち是れ。

(七) 舊河道の新河道より揆離分隔して遂に湖と化成せしもの。利根河畔に這般の湖散在す。

(八) 太地の其の初め水面下に在りしもの、漸く昇起して乾陸となり、而かも其間の窪所丈ケには依然水の殘留して湖をなすもの。常陸下總の境上に在る霞浦、手賀沼等の如き即ち是れ。

湖の主要なる用途は、(一)湖に注入したる川河の水を清淨にして再び之れを排出せしむること、即ち濾淬用、(二)川河の爲めに地塘と爲り其の水量の出入を齊整すること、即ち衡平用。

湖の區分

湖を大別して三となす。

交興湖

(一) 交興湖は川流を受容し又た之れを排出するもの。琵琶湖の如き、横田川、仁保川、愛知川、姉川、安曇川等の川流を受容し、而して又た宇治川なる大なる出口を求めて攝海に注ぐが如き即ち是れ。

排出湖

(二) 排出湖は川流を受容せず、然れども湖底より泉水湧出し、以て川河の源をなすもの。諏訪湖の如き、或は一二小川流を受容するも、其の水分の大概は湖底より湧出する泉水に由り、而かも天龍川を排去するが如き即ち是れ。

受容湖

(三) 受容湖は川流を受容するのみにして出口なく、之れを排去せざるもの。此の如き湖にては淡水のみ終始蒸發して鹽分漸く殘留し、幾萬千年の久しき遂に鹹湖となる、アラル海、裏海、死海、北米合衆國の鹹湖の如き即ち是れ。

鹹湖

所在に依り湖と區分す

所在に依り湖を大別して二となす。

湖及澤

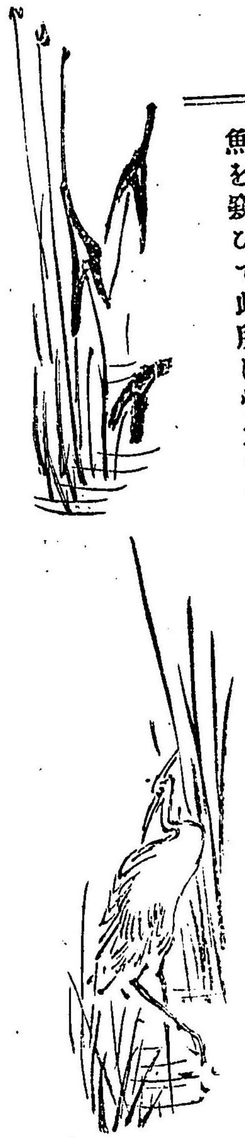
山湖

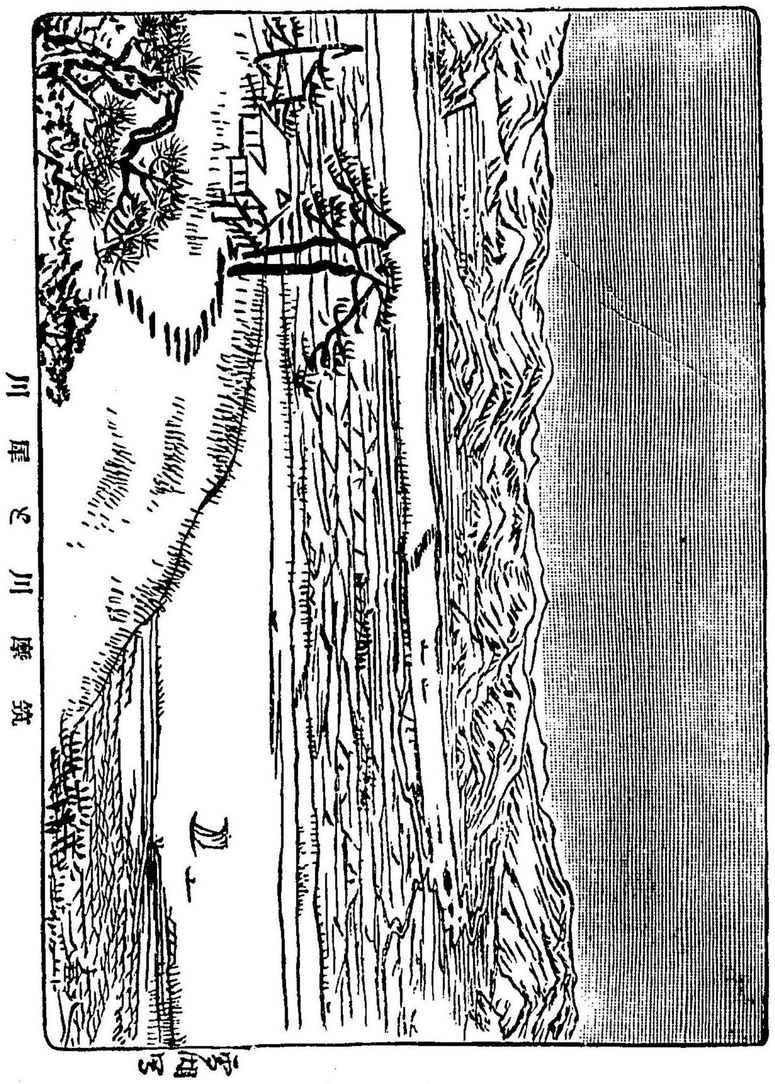
平地に在る湖

(一) 山湖は氷河に因り穿鑿せられたる窪所に雨水の滙溜せしもの、若くは火口湖に多し。此種の湖は大抵底深く、沿岸は嶮峻にして不規律に、其形長細く、風光は絶佳。

(二) 平地に在る湖は川河の幅太まりたるものより生じたるもの多し。此種の湖は大抵底淺く、沿岸は緩慢なる斜面をなし、單一にして規律正しく、其形は廣大にして、所在の風光は佳ならず。

湖は平和の代表者なり、水の絶愛すべきもの此所に在り。唯だ謂ふ勿れ、澤は陰鬱の代表者なりと。慈姑(クワヰ)は此所に甘脆なる根莖を太らし、端正なる燈心草は昂乎として起り、萍蓬草(カヘホヂ)は嬌然として此所に媚び、雪の如き白鷺は魚を窺ひて此所に悄立す、誰か謂ふ、陰鬱の代表者なりと。





川岸を辿る　川國遠信

(十三)　風景（河、湖、澤。詩、歌、畫の材料）

(一)日暮れんとす、柳蔭、渡を喚ぶ、水聲人語を亂し、鶯師輙ち來らず。

(二)敗荷狼藉、白霜枯蒲の根を嚙み、澤上の將軍廟荒れ果てゝ覇氣銷沈す。

(三)岸に登り漁戸を叩きて鯉を買ふ、秋高くして肉肥に長サ三尺。

(四)板橋の霜早く消え、隄上の南枝香動かんとす。

(五)村女瓶を擎げて柳外に蛙聲を汲む、五月の月夕。

(六)一棹花を穿つこと十里、落英水を織り、杳然として仙路の遠からざるを覺ゆ（大和月ヶ瀬）。

(七)湖の全面晶々として鏡の新に磨けるが如く、湖西に當り水に臙脂を流したるが如き空連り、其下に亭々たる長松兩三株聳立す。

(八)菫草野水に沿ひて咲ひ、落花の雪、水に浮ぶ二三片。

(九)夕陽地平線の上に在り、落霞飛鳧、垂楊疎荻の間に隱閃す（常陸霞浦）。

(十)蜻蛉野水に點ず、村童芒を拂ひ之れを捕へんとして忽ち飛び去る。

風景（河、湖、澤。詩、歌、畫の材料）

(十一)雁聲櫓語を枕上に聞く、殿江江上の客亭、山城）。

(十二)水に臨むの亭榭百尺、涼風洒然として來り、爽氣衣を吹き徹す。

(十三)櫻の花吹雪、亂れて水面を布く處、香魚寸々肥ゆ。

(十四)水禽棲を尋ねて、漁舟火を點じ、一彎の新月、筑波の峯尖に懸る。

(十五)竹籬の外、一泓の溪水、石に隨ひて曲折し、涓々として耳を洗ひ去る。

(十六)夕照千里、碧雲一色。　長煙一空、皎月千里琵琶湖）。

(十七)村娘野花を髻上に挿み、溪水に照らして幾度か影を偸み看る。

(十八)楊を溫上に列ね、流を汲みて新茶を煎る、君も我も塵外の人。

(十九)春雨初めて霽れ、湖岸一抹の淡靄疑く外、水面拭ふが如く洗ふに似。

(二十)野水に沿ひて村あり、茅屋簇々三十餘、花竹之れを繞ぐり、垂柳其の七八を遮蔽す（山城木津の途上）。

(廿一)水色澄徹、小魚の來往數ふべし、一、二、三、四、五。

(廿二)曉煙對岸を籠む、炭を載する牝馬、渡より舟に上り、嘶聲霜天に清し。

(廿三)水曾の旗亭、溪聲脚下に聽く、俯して窺へば、斷崖峭立、深サを知らず。

(廿四)芳野瀑布、櫻數十樹附緣巖肩、自下望之、如銀河倒落（齋藤拙堂）。

(廿五)漁郎棹歌を歌ひ、荻花を押し割けて漕ぐ處、花面を拂ひて雪の如し。

(廿六)亂石林立、飛湍上より墮ち、下、石と鬪ひ、山風横さまに射り來り、水沫舟人の袖を打つ（薩摩川內川の上流）。

(廿七)長橋層塔、煙波渺然、濃田河上の黃昏（東京吾妻橋の北）。

(廿八)六花繽紛、上流（東蒲原郡の山中）より薪を載するの舟、市に達する五里の處に到り膠して前まず、舟人潮の來るを待ち、蓬窓の下に横笛を吹く、其聲朗廓、越後阿賀川）。

(廿九)黃雲野に布き、銀の如き一水、其間を曲折し、岸上家あり、蓑笠戸に在り、桔槔（ハネツルベ）空に懸る（肥前佐賀の郊外）。

(三十)水涸れ、沙長く、兩岸の蘆花雪の如し、香魚瘦せ去ること一寸。

(卅一)過綱歩、有二十餘家、在夕陽高柳中、短籬晒晋（ミツアミ）、小艇往來、正如畫圖所見。

(卅二)過東塢、並水皆茂竹高林、隄淨如掃、鷄犬閒暇、鳧鴨浮沒、人往來林樾間、亦有臨渡喚船者、使人恍然如造異境（以上二頂陸放翁）。

(卅三) 苜蓿、チモシー、レッド・トップ等、無數名を知らざるの牧草は咲き亂れ、直徑五尺許の流水は其間を駛りて清洌玉の如し、會〻一牛二羊、岸上の楡（ニレ）樹々蔭に就きて水を飲む（石狩札幌の近郊）。

(卅四) 麥浪千頃、滿眸皆翠色、突兀として滝笛兩三聲、煤煙一抹、其間より起る（常陸、下總の境上、利根川）。

(卅五) 春潮雨を帶びて晚來急に、鱸魚網に上る（穴道（ジンザ）湖の南出雲）。

(卅六) 北上の河心、孤棹波底の月を穿ち來る（陸中）。

(卅七) 余自金陵月堂。謁蔣帝祠。初出北門。始辨色。行平野中。時暮春。人家桃李未謝。西望城壁。壕水或絕或流。多鵁鶄白鷺。迤邐近山。風物天秀。如行錦繡圖畫中（張文潛）。

(卅八) 煙雨空濛漁人石に依りて四ッ手網を曳く、獲たり鯽（ヲナゴ）三四枚。

(卅九) 西潭水流傾沫成白龍。澗可七八尺。冉冉下注。滑而無聲。兩傍石崖峭立。苔蝕蘚暈。時有水珠毳毳滴下（宋濂）。

(四十) 黃金色の夕陽江面を射り、牛、隄上の草を貪りて徐行し、野老叱々す。

最近生紀日本

衆議院議員撰擧者の樓所

最近生紀日本は日本當代の衆議院議員撰擧者の專領地

○日本の地質と衆議院議員選擧區

山惟に峙ちて河惟に駛る、是に於てか流水は多量の沙泥を運搬して漸く幾分を所在に沈積せしめ、隨處に沖積層溪谷を化成し來り、羣で海洋に注がんとするや、河口に到れば河水流駛の速力は頓に減殺し、且つ海潮に壓倒せられ、爲めに運搬し來れる沙泥を海洋中に流出する能はず、乃ち之れを避け、兩岐して海洋中に入る。是に於て積せし沙泥に障碍せられ、自由不羈に駛走する能はず、遂に河口に沖積す。而して河流は遂般沖か遂般沖積沙泥は所謂三角洲を作る。實に沖積層溪谷と三角洲とは最近生紀日本の成業なり。

既に然り、最近生紀日本は沖積層溪谷と三角洲とに因りて成れり、沖積層溪谷と三角洲とは沙泥に因りて成れり、川河の流域に沿ひて延縁せり、即ち肥沃なり、灌漑に便なり、貨物の運搬に利なり、即ち上米の產所なり富饒なる農家の在所なり、高貴なる地價と所有する者の寓所なり、即ち衆議院議員選擧者の樓所なりとす。特に最近生紀日本が多數なる衆議院議員選擧者の樓所なる別個の重要なる理由あり。蓋し植物の最良肥料は實に該當植物を成立する物質を供給するに在り、即ち馬鈴薯には馬鈴薯を喰用せし者の排泄物を供給し、米穀には米穀を喰用せし者の排泄物を供給するを最も適切となす。日本人の主要なる喰用物は米穀なり、故に日本人の排泄物は即ち米穀の肥料に最も適切なるもの、日本立國の經濟たる米產は、日本人の喰料、日本人の排泄物と相互に絕大密接なる關係を有つものとす。既に然り、日本の農業世界には牧畜の業未だ啓發せず、故に動物肥料を施用する絕些に、化學的肥料を施用することも絕些に、加ふるに運搬の利便甚だ容易ならざると以て、魚類肥料を施用することさへ絕些なれば、他の歐米の農業世界と全然肥料を異にし、只管人糞に依賴して耕作物を營養する、是れ當代の現象なりとす。人糞の供給何の所にか饒多なる、人民の繁庶なる所即ち是れなり、人民の繁庶なる所何の邊にか在る、沖積層溪谷の所在と三角洲の所在即ち是れなり。是に於てか知る、沖積層溪谷の所在と三角洲の所在とは、獨り天然の幾多利便存するが爲めのみならず、特に米產國たる日本にては、米穀肥料の關係上、富饒なる農家の在所なると、高貴なる地價と所有する者の寓所なると、即ち衆議院議員選擧者の樓所なると。語を略して謂へば最近生紀日本は日本當代の衆議院議員選擧者の專領地

日本の地質と衆議院議員選擧區

太古代日本、古生代日本は衆議院議員選擧者の樓所にあらず

地なり。

太古代日本、古生代日本は皚々たり、蠱々たり、土壤の生産力は殊に瘦薄たり。勢力を以て生産力の瘦薄と補加せんか、人民は最近生紀日本にのみ聚合して、太古代日本と古生代日本とに寡少なると如何せん。肥料と以て生産力の瘦薄と補加せんか、人糞供給者の寡少なると、動物肥料、化學的肥料の絶些なると、運搬の不利便にして魚類肥料を容易に分配す能はざると如何せん。森林を所有せんか、材木を販賣するに市場の隔遠なると、運搬の不利便なると如何せん、他の歐米諸國に比較すれば材木の價値殊に淺薄にして利潤の甚かならざると如何せん。森林復産物の寡少にして得益の更に少きと如何せん。是に於てか知る、太古代日本、古生代日本、最近生紀日本に比較すれば、富饒なる農家の在所にあらざると、高貴なる地價を所有する者の寓所にあらざると、即ち衆議院議員選擧者の樓所にあらざると。

之れと要するに日本國の地形たる、細く長く、而して中央には嵯峨たる大山系（即ち太古代日本若くは古生代日本）の海岸線に并行して連亘するあり、是を以て衆議院議員選擧區は、其の區劃の結果、太平洋岸にては大概一選擧區の北部は太古代日本若くは古生代日本に屬して、南部は最近生紀日本を成立し、日本海岸にては強半一選擧區の南部は太古代日本若くは古生代日本に屬して、北部は最近生紀日本を成立す。故に太平洋岸にては大概一選擧區の北部に在る者は南部に在る者の爲めに壓倒せらる。日本海岸にては強半一選擧區の南部に起る者は北部に起る者の爲めに壓倒せらる。

然れども此の地質上より由來せる衆議院議員選擧者配布の不平均何ぞ憂慮するに足らん。將來の間、日本の農業世界に牧畜にして啓發せば太古代古生代の兩日本と雖も動物肥料を得べし。理化學にして啓發せば化學的肥料を得べし、森林復産物を多出し得べし　道路の開鑿、鐵道の敷設は運搬の利便を增進し、轉ち魚類肥料を得べし、森林材木の新販路を發見し得べし、以て此等の不平均は漸く消滅せんのみ、何ぞ復た憂慮するに足らんや。唯だ今日地質と衆議院議員選擧區との關係を觀察するも亦た人事地理上の一考究材料なりとせんか。

（鄙著『地理學講義』抜萃）

明治三十年一月廿一日印刷
明治三十年一月廿（紀元二五六九）日發行

〔定價金貳拾錢〕

著者兼發行者　志賀重昂　東京市赤坂區靈南坂町三十四番地
印刷者　熊田宜遜　東京市神田區錦町三丁目廿五番地
印刷所　熊田活版所　東京市神田區錦町三丁目廿五番地
發行所　政教社　東京市神田區南甲賀町八番地
賣所　東京堂　東京市神田區表神保町六番地

版權所有

志賀重昂著

第七版 地理學講義 定價金三拾五錢 郵稅四錢

第七版 日本風景論 定價金五拾錢 郵稅拾錢

山水叢書 島及半島 近刷

發行所 東京市神田區南甲賀町八番地 政教社
發賣所 東京市神田區表神保町六番地 東京堂

75
66

74
66

022424-000-2

74-66

河及湖沢

志賀　重昂／著

M30
ADB-0071